

The Kansai University Bulletin

Osaka, January 1st, 1926—No. 35

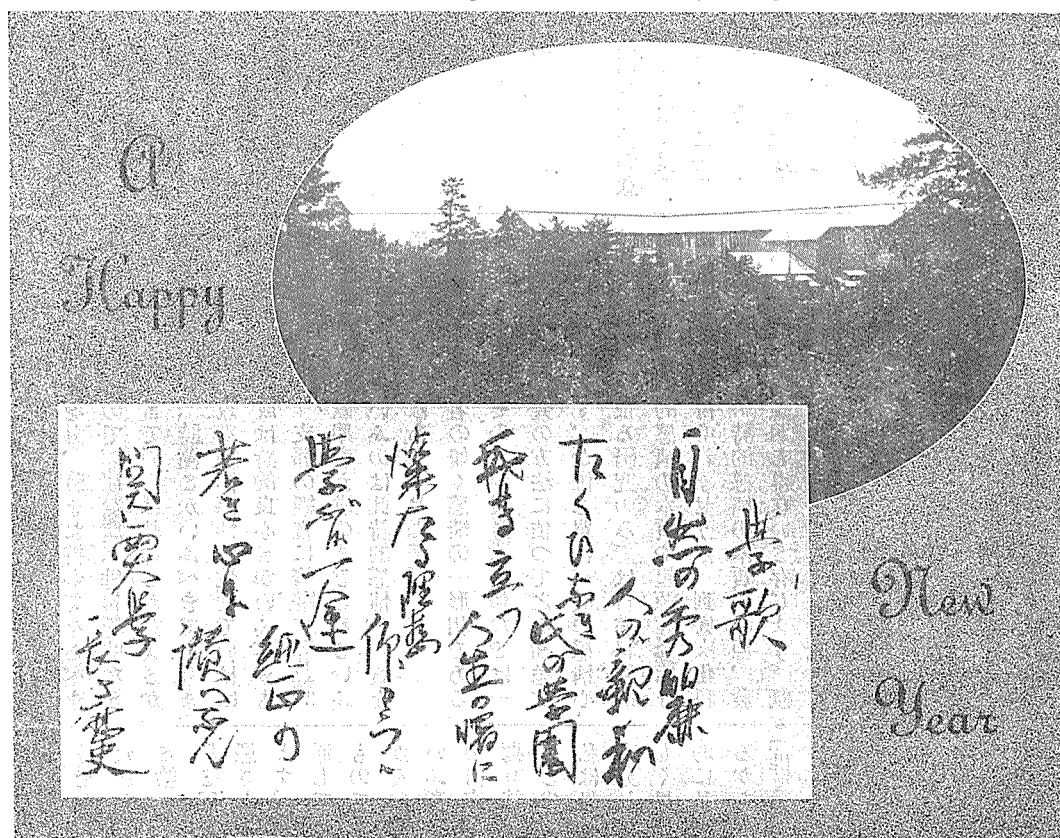
報學山里子

行發日一月一

號年新

年五十正大

University Bosquet and University Song



麗秀の然自

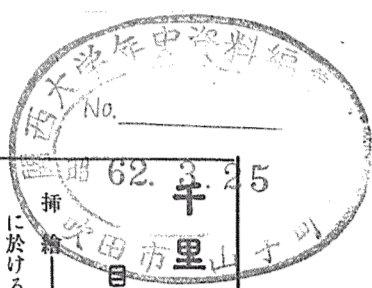
阪大

堀佐土話電
番〇七五五・九四〇一

局報學學大西關

座口金貯替振
番五七八二一阪大

號五十三第



千里山學報 第三十五號

次

挿繪——オルエアンのカテドラル・サン・クロアに於ける五月七日夜のジャン・ターク大祭のイルミネーション外三——書齋に於ける宮島教授——宮島教授叙勳祝賀會に出席せる本學關係者諸氏——藪下吟次郎氏——小林儀三郎氏——箕面公園に於ける校友會大阪支部會員の一部——福島學友會辯論部主催親睦會——英語會主催語學大會記念攝影——引退せる竹田相模部選手——第七・八・九回皇陵崇敬會記念——ア式蹴球部渡支畫報(一・二・三)——第二商業第一回親睦會記念攝影

詩學概論(三) 關西大學講師 新町徳之

ジャン・ターク祭に參列して 關西大學軍事教官 横卷茂雄

琉球警見記 關西大學講師 田邊信太郎

學内報——專門部臨時試驗施行——第二學期授業終了——大學豫科第二學期試驗施行——專門部豫科第二學期試驗施行——學部並大學豫科專任教員會——千里山學會第十四回例會——宮島教授受勳祝賀會——本學教授の學外講演——垂水理事選歴及勤続三十七年記念會決算報告——第二商業學校彙報——柿崎記念文庫基金寄附申込者芳名

校友の面影——藪下吟次郎氏 小林儀三郎氏

校友彙報

千里山俳壇——千里山歌壇

千里山學報維持費受領報告

關西甲種商業學校彙報

學生彙報

學生寄稿

詩學概論 (三)

關西大學講師 新町 徳之

- 第一 緒言
- 第二 詩學概論の性質
- 第三 詩學と他の科學との關係
- 第四 詩の意義
- 第五 詩の發達
- 第六 詩の文化價值 (以上既述)
- 第七 詩の内容
- 第八 詩の形式
- 第九 詩の描寫
- 第十 詩の分類
- 第十一 詩の鑑賞
- 第十二 結 論

第七 詩の内容

詩に内容と形式とがあることは第四、詩の意義の所で述べた。これは獨り詩のみに限らず、有ゆる藝術に於て然りであるが殊に詩に於て之を研究するの必要をみるのです。そしてその内容形式いづれが先きに發達しつれを重んずべき乎といふやうな根本的問題があるが私はそんな面倒臭い問題をこの貧弱千萬な「詩學概論」で解決しようなどとは毛頭考へていません。今は唯詩の發達如何に拘らず、その内容はその形式と共に密接不離の關係にあるといふことを假定して私の説述のペンを進めさしていただきます。

詩の内容は何である乎。それは私によれば詩の内容は詩的感情である。詩的感情とは實之の所謂「人の心」であるといふに歸する。詩的感情とは「心理學」や「美學」などいふ所の美的感情と殆んど全く同性質のものであつて有ゆる詩、例を日本の詩に取れば和歌・俳句・漢詩・川柳・都都逸・民謡といつたやうなものそれ自身が持つてをり、將また持つてをるべき管の滋味をいふので、和歌趣味、俳句趣味などがその一例で一言でいへば詩趣とか詩美とか將また詩意、詩心、詩藻とかいふべきでありまして止むに止まれぬ純粹感情の發動でいはば感情の良心とか或は詩的良心とかいふべきものでありませう。支那の經書に修辭立其誠といひ江戸期の歌學者が歌のまごころといふこゝを八釜敷くといふのは此詩的感情の本質を道破したものでありませぬ乎。

詩的感情はその名の如く感情の一形相であるからその本質やその起源、發達、分類などは一般の感情心理研究の方法に依つて之を知悉することが出來ます、が併し單に一般の感情心理研究の方法に依る研究のみでは自然科學的現象としての詩的感情の本質や起源、發達、分類などは知悉し得られませうが、到底文化科學的現象としての詩的感情の本質や起源、發達、分類などを説明し得ないで存じます。概して感情心理は一般心理學でもその研究は六ヶ敷しいものであるのに更に詩的感情の研究は非常に面倒なものであります。それは詩的感情の研究は單に事實としての研究ばかりで満足すべきものではなく百尺千頭更に一步を進めて要請として將理想としての研究を必要とするからであります。これは「倫理學」に於ける良心論と殆んど同じ方法論的研究法によつて成し遂げられるもので實に詩的良心の本質、起源、發達などを明かにして詩的規範の定立に基礎附けをするものであります。

詩的感情は詩の内容であるが、併し茲に詩的材料といふものがある。詩的材料とは單に之を詩材ともいつて詩的感情がその本質を依憑させる自然人事の全部をいふのである。之をわかり易からしめんがために例を繪畫にしろと繪畫にも畫趣といふものがある。畫趣は詩趣と同性質のもので、その畫趣の本質を依憑して之を發揮するものが即ち畫材であります。繪畫の材料といふ意味です。この畫材を通して畫趣は茲に始めてその本質を發揮するものであります。詩材も亦これと同じく詩趣がその本質を發揮するところの所縁となるといふ意味で詩趣と不即不離の關係にあつて詩の内容を構成するものであります。でこれは獨り詩歌、繪畫ばかりでなく有ゆる藝術はみなこの二つをその内容といつたしてをります。私は思はず識らずに六ヶ敷しく自分自身にも充分わからない言議を弄したことを心はづかしと思ひます。以下私はズットくだけて具體的に私の所謂「詩の内容」の如何なるものであるかを略説いたしませう。

「俳風柳樽」に

すつぽんに拜まれた夜の暖かさ
鼈は料理されるまきにもがいて拜むやうな姿をする。その鼈を食へた夜は暖くて心地よく寝られる。こいふ心持を「拜まれた」と言つて詞に綾をつけて詩にしたのださうな。

駿河町疊のうへの人通り
今の東京の三越呉服店の前身である越後屋の繁昌を歌つたもので大正聖代の昨日今日でも不景氣知らずに千客萬來の賑しさは此の詩の永久性を與書したやうに感じられる。と同時に詩情、詩材の如何なるものであるかの一斑

をうかがうことが出来ませう。

今は故人になつた私の俳句友達の紫外は

ひらむ、ひり、ひる、ひれ、なぎみ尻ひり蟲

さいふ句を作つて私を驚かしたことがある、

まことに下がかつた文字で恐縮しますが御許

しを蒙つて今一二首

大徳の糞ひりをはす枯野かな 蕪村

この處小便無用花の山 其角

これは誰でも知つてゐる句で言葉は如何にも

下品であるが併し一讀再讀すんで三四讀す

るにそこに俳味の饒さが横溢するではありま

せぬ乎。こんな譯だから韓圖がその「實踐理

性批判」(Kritik der praktischen Vernunft)

の終りに

Zwei Dinge erfüllen das Gemüt mit

immer neuer und zunehmender Bewun-

derung und Einfurcht, je öfter und

anhaltender sich das Nachdenken damit

beschäftigt: der bestirnte Himmel über

mir, und das moralische Gesetz in mir.

二つの物があつて愈多く愈永く之を省察す

るに従ひていよいよ益益新らたに彌ます驚

嘆と畏敬の念に充たされるやうに感じる

そは上にあつては星辰、内にあつては道徳

法である。

さいつた肅然襟を正すやうな理想的な事柄は

いふも更に牛溲、馬勃、味噌、糞、蚊、蚊

なものでも苟も詩的感情の由縁なるものは

悉く詩材なるのである。惡徒でも惡魔でも

天使でも熊公、八公でもお三、お鍋でも悉く然

りであります。

幕末の歌人、大隈言道の「草徑集」には居眠り

を歌つた詩が多いので自分は何さなく共鳴す

うしろにも倒る許りの居眠をさがめぬもの

は燈火なりけり

まざるめばより添ふ閑の柱さへ一本の花の

も心地する

この外に拾三首許り居眠の歌がある。すでに

居眠が詩材になる以上は噓、欠、眩暈なごでも

苟も詩的感情に所縁があれば何處でも何時で

も詩歌になるこはいふまでもありません。

私はある時、ある都市のある鐵道ホテルで

「鐵道世界」にいふ雜誌を讀むだ。「交通地理

學」の資料さがしのためだ。が併しそんな資

料はみつからずにつかつたものは詩だつた

ので私の悦びは並大抵ではなかつた。その詩

は

排雪車 北海道追分車掌室 後藤貞吉

ボウオオー

私の乗つた排雪車

このさびしい北國の驛又驛

雪と戦ふ軍用タンクは

走る、走る……

ああ壯快!

果てしない石狩平野の

肌寒き灰色の風の中

吹きたまる雪をかき破り、かき破り

横切の進む雄雄しい姿よ、

456!

私の乗つた排雪車

自分の生活を通して生命の姿を見出さうとす

るところを詩にしたものでせう。現實の中か

ら詩材をみつめてそこに動きなき常磐垣盤の

「詩の王國」を建設して生活を深化し聖化し淨

化して人間としての生き甲斐ある悦びの行進

曲として美しい魂 (Schöne Seele) の姿をみ

いだしたその男らしさは正に是れ

佛蘭西の「アンリー、フランク」が勇敢に

私は生の激流に身を投げ込んで泳ぎませう

Je nagerai dans l'eau violente de La vie.

さいつたやうな感じが致します。自己の生活

そのものを詩にした者には日本で和歌の西行

連歌の宗祇、俳句の芭蕉があり、支那で杜甫、

李白があり、西洋でシェクスピア、バイロン

さいつたやうな人人がゐます。此等の人人の

詩はその表現の形式を異にしてゐますが何れ

も高い天分の詩的感情の持主としてその自己

生活の深き省察と藝術をひたさ結びつけて

獨自の「詩の王國」を建設し得たことは偉大な

ものさといふべきで詩の永久性は充分に承認せ

られたのであります。「排雪車」の作はいふま

でもなく未成品であつて諸大家の作品に追隨

するこゝ能はざるは勿論であるが、併しなが

ら作者自身の持つてゐる詩的感情の尊さは、

諸大家のそれと大した差別はない筈だ。私は

斷言致したう御座います。何より貴ぶべく仰

ぐべきものは詩的感情であります。この詩的

感情は時として私共に恰も君主の命令の如

く、神佛の宣託のやうに私共に詩作を命令す

るこゝがあります。昔の名ある詩人がインス

ピレーションにうたれて名作をのこすは即ち

このこゝをいふので私は殊にこのこゝを韓

圖の所謂「道徳上の無上命法」にならひて

詩歌に於ける無上命法

さいつたやうな希望をもつてゐます。希臘

の詩神、日本の和歌三神などは私にいはせれ

ばそれは詩的感情を宗教化したもので此の詩

神、歌神がやがて詩歌に於ける無上命法の發

令者であるを申し上げたいのでございます。

「古今集」に凡河内躬恒(八五九—九〇七)

世を捨てて山に入る人山にても猶うきさき

は何地ゆくらむ

この歌を本歌として狂歌に自己の磊落をよせ

たものは蜀山人(一七四九—一八二三)の

世を捨てて山に入るさも味噌醬油さけの通

路なくて叶はじ

である。同じ詩材であるが試みに「時代」さ

いふこゝを問題から取り去つたあそこで心靜かに

此の二つの歌の比較評論をしたならば何處に

か此の二つの歌に共通の點があつてそこから

各分岐して一つは本歌となり一つは狂歌とな

つたやうに思惟されませう。「詩の内容論」の

立場からいへば本歌が狂歌が將また狂句

俳句、民謡、都都逸などの形のこのこゝは重要

な事柄ではない。これ等の作品の持つてゐる

詩的感情の如何が大切だ。

宋の學者邵康節(一〇一一—一〇七七)の「擊

壤集」卷四

清夜吟

月到天心一處 風來水面一時 一般清意味

料得少人知

この五絶は「性理大全」七十にも載せてあつて

註に「熊氏剛大曰、此篇借物形容聖人本體清

明、人欲淨盡、蓋月到天心、則雲霧盡掃、風來

水面、則波濤不興、此正人欲淨盡、天理流行時

也」さある。私が考へるに康節は夙に道學を

修めて深く詣りその胸中は自然に風月の清意

と相叶ふものがある。しかもその摩訶不可思

議な妙味は到底これを言句に表現するこゝは

出來ないので唯みづから自得の境地を故に人

の知るこゝ稀なりさいつたのだらう。何も別

に邵康節が獨りよがりでないではない、彼

の怡然として自得した詩的感情が不知不識の裏にこの詩の表現となつたもので正しく詩神の降格といふべき境地だうう存じます。

Twilight

John Maschfield

Twilight it is, and the far woods are dim,
and the rocks cry and call,
Down in the valley the lamps, and the
mist, and a star over all,
There by the rick, where they thresh,
is the drone at an end,
Twilight it is, and I travel the road
wishing friend.

I think of the friend who are dead, who
were dear long ago in the past,
Beautiful friends who are dead, though
I know that death cannot last;
Friends with the beautiful eyes that the
dust has defiled,

Beautiful souls who were gentle when I
was a child.

メ氏は一八七四年(明治七年)生れたから今年
は五十一歳だ。下手な私の譯は止めて以心傳
心的にこの詩を誦する時、そこに詩趣のみな
ぎれるものあるを覚えるではありませぬ乎。
更ニ

Auf die Morgenröthe

Wann die goldne Frühe, neu geboren,
Am Olymp mein mather Blick erschaut,
Dann erblas' ich, wein' und seufzte laut:
Dort im Glanze wohnt, die ich verloren!

Granter Tithon! du empfängst Auran
Froh auf's Neu', sobald der Abend thaut;
Aber ich unarm' erst meine Braut
An des Schattenlandes schwarzen Thoren,
Tithon! deines Alters Dämmerung
Mildert mit dem Strahl der Rosenstirne
Deine Gattin, ewig schön und jung;
Aber mir erloschen die Gestirne,
Sank der Tag in öde Finsterniss,
Als sich Molly dieser Welt entriß.

(G. A. Bürger)

を誦して默想一番しませぬならばやうに所謂
「詩藻」の如何なるものである乎が泉の如くに
湧き出て讀者の意識流の内に流れ込むやうな
好い感じを感じるに相違ありません。更に此
の詩を朗吟と聲ほがらかに吟誦しますならば
作者の詩情と吟誦者の詩情とが一つの共鳴を
なして得るいへぬ光景を現出するものであり
ませう。

私は此の章を結ぶに方りて「シエキスピア」が
「ハムレット」の母である王妃に言はせた

More matter, with less art.

技巧を少なくしてもつゝ内容を
さういふ句を思ひ出さずには居られません。日
本・支那・英米等に於ける詩の沿革史をひも
くならばそこに徒らに詩の形式に腐心して
その内容を閑却せむとする傾向があることは
争はれない事實であります。勿論、詩の形
式も大切な詩の要素ですがそれと同時に或は
それ以上に詩の内容は更に更に大切でござい
ます。

(未完)

ジャン・ダーク祭に
參列して

關西大軍軍事故官 横卷 茂雄
陸軍歩兵大佐

千里山學報へ何かフランス土産を書けとのことで
したから、覺束なくも日記を辿つて茲に其實を塞
ぐ次第です。臘を噛む如き此乾燥無味な而も冗長
な記事で貴重の紙面を汚す事誠に汗顔の至を堪え
ませぬ。然しジャン・ダークの様な猪勇を揮ひ敢て
提出致すものに決めました。諸賢も亦彼女の如き
犠牲心と忍耐心を以て御覽下さいましたなら私
に取りて望外の光榮で御座います。

O Sainte, O Jeanne d'Arc O la bonne Lorraine
Tu ne fus pas pour nous avare de la peine;
Devant notre pays, avengle et châté,
Pastoure, tu frémis d'une grande pitié,

TH de Banville

な、聖徒、な、ジャン・ダーク、な、善良なるロ
ーレーヌ人

なれば、汝が苦しみを我等の爲に吞み取りき
我等の國の爲に猪突せり、自らに鞭でり
人の子を導く羊飼、汝が胸は大慈大悲に燃ゆ

* * * * *

千九百二十四年マロニエの花咲き旬五月は
六日の夕べ佛蘭西「オルレアン」の、こある旅
館、私は此地屯在の歩兵第三十一聯隊から歸
るに、待ち構へた女將は一通の手紙を差出し
た。封を切るに黒梓つきの女名刺で

4 Rue Jeanne d'arc

Madame Maurice Fourrest

sera chez elle le 7 mai 8h 1/2

明七日夕に來て呉れとある。差出人は未亡人
で私の全く知らない人である。女將に聞いて
も主人に聞いても分らない。一體私の當「オ
ルレアン」に來たのは一昨日なので、昨日や

つゝ聯隊の挨拶をすませたばかり、未だ西も
東も分らない。そこへ突然此女手紙である、
面喰はざるを得ない。處が恰もよし聯隊の中
隊長が訪問に來たから之に聞いて萬事了解し
た。此「フルス」夫人の御亭主こそは私の今
度隊附した歩兵第三百一聯隊長として歐洲
大戦中「アルゴンヌ」の役に其軍旗の下に名譽
の戦死を遂げた人なのである。又其息子は現
に同じ聯隊の中尉副官をして居るのである。
そう云へば私は今日聯隊本部で其「フルス」
中尉に面會した。併し明晩は聯隊長代理(聯
隊長は只今メッツの學校に招集されて茲一月
計り不在である)ドワートル中佐から晚餐の
先約がある故、其旨を書いてフルス夫人の
宅へ斷りにやつたが、折返して夫人から水莖
の跡いとも美はしい次の様な手紙を受取つた
敢て私は美はしい水莖云ふ、實際「フラン
ス」の教養ある上流婦人の文字は「ヤンキー」
杯の蟹の跡さは大分違ふ。私は此手紙を見て
轉ろに鶯堂風の女手紙を聯想した。

大佐殿

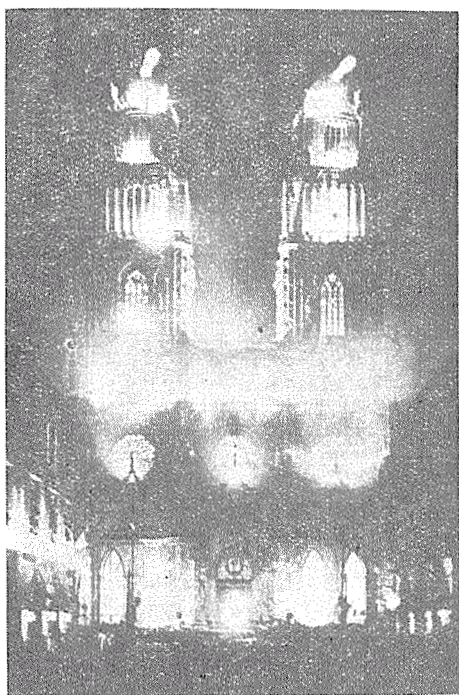
私はあなたに教會のイルミネーションの御
見物を御願ひ致したい爲め、明晩拙宅に御
出を御案内申上げたので御座います
私は此御祭の爲ドワートル中佐其御家族
をも毎年御招き致して居ります、私は、あ
なたが明晩同中佐の御宅で晚餐を遊ばす事
も承知して居ります。又私の倅も御一緒に
其晚餐に参りますから、さうぞ晚餐後御一
緒に午後九時頃私方へ御出の程を御待ち申
上げます
大佐殿、さうか私の最も嬉しい感情の表明
を御受け下さいませ

モーリス、フルス

これで、すべて氷解した。そこで私が偶々思ふに浮んだ事がある。「オルレアン」云へば人口五萬計り、日本なら差しづめ和歌山とか高知とか云ふ市である、私の旅館は此地第一の社交の中心であり其主人は殊に在郷の砲兵准士官である。假りに高知邊りで日露戦争で其聯隊長が戦死し其末亡人が依然として、そこに住んで居るとする。一等旅館の女將が其消息を知らぬ筈は先づないと思はれる。是れ即ち英でも佛でも、聯隊と其衛戍地との間には日本の様な親しみのない證據である。土佐の子弟は高知の聯隊旗の下で旅順に奮闘したが「オルレアン」の聯隊旗の下には「オルレアン」

の子弟は一人も居らないで他の地方の子弟が働いた譯である。現にオルレアン衛戍兵には黒人も居れば安南人も居る。私の聯隊杯は今「アルサス」の青年が這

入つて居る。従て前聯隊長夫人の名は聯隊將校團では有名であるが「オルレアン」の町では路傍の人に過ぎない。蓋し是れ主權と軍隊との關係から来る微妙な所では等の國では萬一を顧慮して其地のものを其地の兵とする事を避けて居る。そこで是等の軍隊は日本の聯隊の様な郷土的色彩を持つて居らぬ。今更乍ら我國體の難有さを感じた。然し非常特別の國難に際しては佛國でも現地徵募をやる。現に千八百七十年の獨佛戰爭中巴里が包圍を受け



た際「オルレアン」の士民は大に奮起して新軍を編成し「ガンベッタ」は輕氣球に乗つて巴里を脱出し此地方に来て大に愛國の氣勢を擧げた。今も此市中に「ガンベッタ」の名を冠した廣場がある。

元來今度の私の隊附は其目的主として五月中旬に入營する新兵教育の狀態を視察するにあつたが、隊附の場所就ては全く私の欲するままに委せられてあつたので、私は此地を選んだのである。何が爲、私は「オルレアン」を

選んだか。夫れはこうである。嘗て「サン、メキサン」歩兵學校から巴里への歸るさ、私は二三子と共に此地に「ジャン、ダーク」の遺蹟を訪ねたのであつた。La Puelle d'Orléans

「オルレアン」の少女は私には随分久しい以前からのあこがれである。其際「ジャンダーク」の博物館で同行のT大尉と二三の話を交はした、軍人上りらしい守衛が私を指して「あの方の階級は何ですか」と訊いたので「中佐だ」と答へるや否や（當時私は中佐であつ

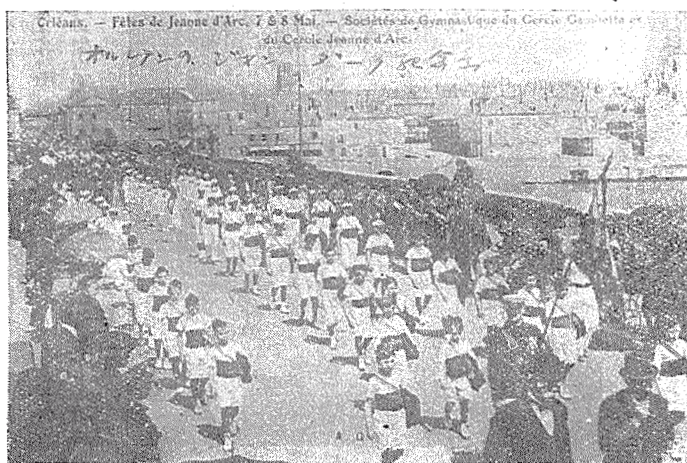
た）パネの様に直立し脱帽して敬禮した。又「ボアチエー」の停車場の料理店で休んだ時も同じ様な質問を發した田舎の物持ちらしい二人のお爺さんは私達の爲に態意敬意を表して三鞭酒を抜いてくれた。成程當年の「ガンベッタ」が此地方に信賴したのも所以ある哉と深く感じた事である。今や純眞な民族精神は大都市では其影を没し地方に之を存して居るのは英獨佛皆然りである。今一つ私の考えた事は婦人問題である。身親しく白人の家庭内に入り其家閨氣に浸りつつ遙に故國を凝視する時、私は我武士道が其根源を家庭に發する事を見出した。日本武士が戦陣に臨み、四方に便して毫も後を顧みないのは、其背後に立つ日本女子の犠牲心、没我心に存する事を痛感した。そこで人心の荒廢を憂ふる前に、先づ以て婦人の訓練教養に留意せねばならぬと考へた。事は餘りに私の専門と縁遠い様であつて決して然らず、楯の両面であるを考へた。乃ち國民精神と婦人思想に關する興味は私を驅つて再び「オルレアン」に向はしめたのである。而も天亦私に幸して年に一度の「ジャン、ダーク」祭、佛國第一の「ジャンダーク」祭に遭ひ得たのである。明日、明後日の兩日が此祭典であつて私は公式に各種の場合に招待されて居ると共に、今亦私的に色色の招待を受けた次第である。

「ジャンダーク」の事蹟に就ては茲に詳説すべく餘りに著名である。要するに此純情の少女は熱烈なる宗教心と激越なる愛國心以外何物もない所の佛蘭西「カソリック」の典型と云ふに過ぎて居る。千四百十二年邊境「アルサス」の「ドムレシー」に生れ妙齡僅に十七歳千四百

二十九年の春まだ淺き二月、机然として羊飼ふ鞭を神受の劍にかへて「シャルル」七世の闕下に奔り幾程もなく一隊の將となり先づ此「オルレアン」を英軍の手より奪い回へして、日に非なりし佛蘭西の形勢を逆轉せしめた。彼女は醒めては戦ひ寢ては祈り側目をふらず常に陣頭に其軍旗を揮ひ士卒を勵いた。されど「コンピエーヌ」の哀しきタベ餘りに深入りした彼女は、傷いて敵に囚はれ、情知らぬ英兵の爲千四百三十一年月も同じ「オルレアン」を回復せし五月、十九歳を一期として花容空しく焚殺されて了つた。然し佛蘭西人は永久に彼女を愛し永久に彼女は死なないものと考へて居る。國難の場合は必ず現はれて佛蘭西を救ふと信じて居る。現に今回の大戦後彼女の遺骸が聖露内の將士を鼓舞して戦勝の基をなしたと考へられ平和克復と同時に、千九百十九年羅馬法王ブノア十五世は彼女を聖徒に列した。又其祭典は國祭として都鄙各所で盛に行はれ、勢の及ぶ所遠く北米紐育市に迄立派な銅像が建立せられるに至つたのである。彼女の眞相に就ては歴史家として研究の餘地は尠くない。然しうっかり佛蘭西人にこんな疑問を發するごぶんなぐられる虞がある。事程左様に五六年の歲月は彼女を理想化した。我我は之を彼は云ふ必要はない、我我は今日傳つて居る聖「ジャンダーク」なるものを通じて佛蘭西人の理想を觀取すればよい。佛蘭西人の趣向を窺知すればよい。五月には到る處で「ジャンダーク」の祭が営まれが、勿論此「オルレアン」が最も重要なものである。現に私の旅館でも既に祭典見物人で満員の有様である。

五月七日は快晴であつた。初夏は云ひ乍ら大陸の常、燦爛たる百花には尙晩春の情趣を留め、薫風のそよぎ新緑の色自ら遊子の心をそる。午後六時私は軍服に剣を佩びて旅館を出た。途中花屋に立寄つて豫め頼んであつた花束を自動車にのせた。巴里の考で眺へたものだから此花束は素ばらしく大きい。中型の自動車だが私ミ花束ミで車室は一杯になる程もある。「ドワートル」中佐夫人が其後何遍遇ふても此花束の禮を云ふたのも無理はない。イヤ物價が安い云へば頓て着いた中佐の家杯も二階建の一軒構へで巴里の將校の様な「アパルトマン」の小さな部屋ミは全然趣を異にする。何にせよ、日本人程、食ミ住ミのお粗末なものはあるまい。其癖着物は收入不相應におごつて居る。佛蘭西の將校杯で絹の襦袢を着てるものは殆んぎないミ同時に營養不良の顔をして居るものもない。家屋に至つては野營地の「バラック」でも日本の文化住宅よりは衛生的である杯ミ考へ乍ら下女に花束を渡して「サロン」に通る。「ドワートル」中佐は、もう五十五六緒ら顔の禿頭、健康其者の様な逞しい好爺爺である。一體我我は向ふの將校に比べて進級が早い。其代り向ふでは日本の軍縮の様な首切は殆んぎないから皆停年迄安んじて御奉公する。結局我我の方は太く短く彼等は細く長くである。イヤ餘り太くもないから先づ我我は細く短くであるかも知れぬ。「サロン」では先着の「フールス」中尉が空色の禮装美美しく、背廣服に碎けた中佐ミ共に迎へて呉れる。續て夫人ミ二令嬢に引き合される。夫人は四十四五歳でもあらう。令嬢——姉は二十三、妹はやつミ女學校を出た計り

二人共栗鼠の様に快活な「シツク」な娘さんである。姉嬢は近く此「フールス」中尉ミ結婚する事は其後知つた。妹は私の發音を可笑しがつて時々笑ひ、お母さんから嗜められる。應接間には随分多くの日本の美術品がある連に軍人丈あつて其多くは武器である、居合に迷ふ長い刀も二つあつて之を國旗竿の様に壁間



に交又してある。又北齋の版畫杯持ち出して自己に批評を求めたりした。是等の蒐集は凡て中佐の嚴父——今も健在して南方佛蘭西に住んで居る海軍大佐が屢屢長崎に遊んで持ち來つたものだ云ふ。中佐自身も亦日本を好愛する點に於ては父に劣らぬ、從つて私の聯隊に來たのは非常に嬉しい杯話す。實際此人

は終始一貫随分よく私の爲に骨を折つて呉れた。日本の文物を歐米に紹介する事が目下の急務であるミつくづく思ふ。夫から女達ミ「ピエール、〇チ」の話をする「オベラ」や「コミック」の話に花がさく。中佐は此外に三人の男子があつて夫夫婦騎砲の將校であるミ自慢する。フールス中尉も男兄弟は皆將校だ云ふ。そして軍人の家庭は皆、一般の佛蘭西人ミ違つて子供が多い杯話す。食事は私を主賓ミして之れ丈の人達で極めて家庭的に愉快なものであつた。佛蘭西中流の家庭の料理は下手な料理屋より餘程上手である。日本の文化婦人が一生香物の眞味を知らないのミ好い對照である杯又しても餘計な事を考える。

九時頃食事を了り興はつきないが辭して「フールス」中尉ミ共に同氏の宅に行く。フールス中尉の宅は大伽藍 Cathedral Saint Croix の眞正面、ジャン、ダーク町の角座敷の三階である此邊はドワートル中佐の町ミ違つて凡て「アパルトマン」組織である。併し仲仲立派な家で中尉ミ大佐未亡人ミ下女一人では淋しい位廣いから青年將校達が「クラブ」の様にして始終遊びに來る杯話す乍ら階を上つて襪を掛するミ既に六七人計りも紳士貴夫人が集つて居る。之は又、先刻の水入らずの家庭ミは違つて何たる晴れがましきだらう。紅紫取り取りの夜會服は金碧燦爛の軍服ミ相交错し香水の香りミ「シガー」の烟りが難然ミして渦を卷いて居る。打ち見た所多くは將校の家族らしい。私が這入つて會釋するミ婦人達が口口に「コネル」「コネル」ミ歡呼して迎へる。中尉は Mannan, Mannan ミ云つてお母さんを群衆の間から連れて來る。「フールス」未亡

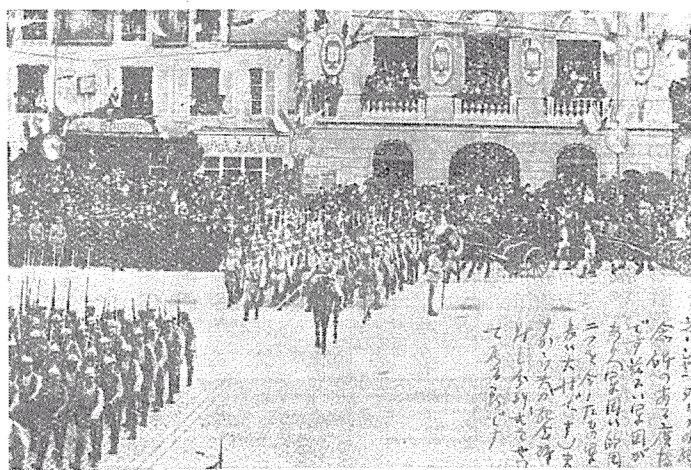
人は六十歳計りの上品なお婆さんであるが將校家族の社交界では可なり重きをなして居るミ察せられる。私を見るミ自分の子の様に喜んで主人人に片端から紹介して呉れる。お蔭で私は此一夜から全く「オルシアン」衛戍將校ミ惡意になつた。軍團長「ボック」大將ミも握手する。大將も禮装で來て居る。極めて親切に私に話をする。大將に昨日御訪問を受けたが生憎不在で失禮しました杯云ふ。室には故大佐の寫眞がある。見るミ我黒木大將にそつくりの顔をして居る。黒木將軍が白人の血を惹いて居る杯歐洲の從軍記者が誤傳したのも尤もだミ思つた。茲で又現聯隊長「ランベール」大佐の夫人ミ其息子にあつた。此親子は前から私の來るのを俟つて居つて恰も久しく遇はなかつた親戚にめぐり回せた様な調子でなつかしさうに話をする。かうして見るミ聯隊の人達は早くから私の來るのを喜んで待つて居つて呉れたミ見える。主人が早く「メツツ」から歸つて來ればよい杯云ふ。又戰爭中佛蘭西に居つて巴里の婦人ミ結婚した日本のK大佐の近狀を私に聞いた。K氏は軍縮でやめた云ふミ顔を曇らして「日本の陸軍ではさうして俊才がさんさん止めますか。國家の損失ぢやありませんか。私は大佐の結婚披露の時「オテル、コンチナンタル」に参りました。夫は夫は立派なものでしたよ。私の隣りにはたしか日本のT公爵が御座りになりました」杯話しは中中永い。息子さんは十七計り可愛い美少年で「キチン」ミした「タキシード」を着て色色無邪氣な話をし私のそばに計り居る。お母さんが時時見に來ては「おまへはさうして「コネル」のそばに計りくつついて居

るのか」さ笑ふ。其後「オルレアン」の滞在間此少年から如何ばかり私の淋しい心を慰められた事であらふ。行儀正しく氣概があつて愛國心が強く馬が好きな此少年を見るたびに十字軍時代の Page を想ひ起さざるを得ない。大正日本の少年には最早こんな型を見出さない様に思ふ。訣別の際私は彼の記念帳に宣長の大和心の歌を佛譯して、書いてやつたが彼は喜んで眼に露をさへ宿して堅き握手を交した。

室には美酒嘉肴を備へ窓から祭を俯瞰し乍ら隨意に取つて食ふ寸法である。今夜は珍らしい爲か軍團長よりも誰よりも私が一等持てる様である。佛蘭西の令嬢はジャンチーである。あちらからも、こちらからも「コロネル」「コロネル」さ色色なものを勧めにくる。一人のを喰つて他のを喰はない譯に行かぬ「オヤギうして私のは召上つて頂けないでしょう、コロネル」さくる。止むを得ず又煩張る。御蔭で翌日はすつかり腹をこはした。

事實「オルレアン」の「ジャンダーク」祭は今日の正午から始まつて居るのである。先づ今日の正午十二時には教會の高廊に衛戍の喇叭隊が上つて聲高く、光輝ある大祭の執行を布告した。同時に教會の鐘が十五分毎に鳴り出して午後八時に至る。午後九時には在りし昔「ジャンダーク」が占領した其「トゥルー」の要塞上で衛戍砲兵が禮砲を發射する。次に衛戍諸隊の全喇叭手、鼓手、大喇叭手、軍樂隊が一大聯合部隊を作つて乗馬さ徒歩の二隊に別れ今や我等の眼下、教會の廣場に集りつつある。十五世紀の騎士達が夜襲の首途もかくやミ計り或は馬に或は徒歩に傳統的の軍樂がタ

暗の間から奏でられ馬蹄の音、劍戟の響が之に和する。群衆は既に廣場の周圍、歩道の上に黒い森の様に黙然として列んで居る。軍樂隊が既に序幕を切つて落した。之より愈々本舞臺となる。九時半になつた。「ジャンダーク」の軍旗を渡す式が行はれる。「オルレアン」の市長が助役や市會議員を従へ兼て市廳舎に安



置してある「ジャンダーク」の Vétendard (軍旗) を捧けて教會の大玄関前にやつて来る。教會から洩れる火影に「ジャンダーク」のほの白い長旒が神秘的にゆらめいて居る。市の旗もひらめいて居る。頓て教會の中から (City Guard) 樞機員(大僧正)が金欄の衣美美しく衆僧を従へて玄関前に出迎へる。市長は軍旗を

「カーヂナル」に渡す「カーヂナル」が何か簡單な挨拶をする。私達は息を凝らして之を眺める。距離が遠くてよく分らないが何だか身は遠く中世紀の昔に在る様な氣がする。折しも妙なる音楽が起る。之は教會の尼僧さ聖歌隊の合唱である。A Vétendard の歌である。

同時に轟然一發の狼烟天に冲したと聞く間もあらず、我等の眼前にそそり立つ「サン、クロア」の大「カテドラル」は一齊に赤くなつた。今迄黒い森の様であつた群衆も我等の顔も皆一樣に紅葉の様になつた。「ロシク」の大伽藍——十三世紀に創造せられ佛蘭西王朝の最盛時代「ルイ」十五世の下に巨匠「Carré」が心血を注いで「ジャンダーク」の爲、築きあげた高さ百「メートル」を超える大「サン、クロア」は今や一面に赤色の火ミ化して居る大小幾百の窓、二雙の高塔は悉く烟を吹き出して居る。紅蓮、大紅蓮、ああ想ふ、ありし日の「ジャンダーク」、四百九十六年前の今宵、彼女はそつと劍鏢の十字に接吻し更に士卒を鼓舞して英將「タルボット」の指揮するあの今、砲聲がする「トゥルー」の城を占領したではないか。廣場に叫ぶ群衆は當年「オルレアン」の「ブルジョア」——「ジャンヌ」の旗下に奮死した、その武士達ではないか。塔上に並び立つ教會の役員達は「タルボット」麾下の英兵とも見える。quel magnifique! quel sublime! 私は覺えず傍の軍團長さ大佐末亡人にかく嘆賞の聲を放つた。此 Embasement 即ち「イルミネーション」は聖堂到る處の階段に「ベリナル」火の様な一種の花火を置き之に一齊點火したもので赤色の焰を上げる事約十數分蓋し中歐の一偉觀たるを失はぬ。此宗教的愛

國制的聖火が觀衆の心胸に鬱屈する情熱に點火せられたならば冷酷氷の如きものでない限り、必ずや大に外に向つて護國の焰を擧げるであらふと思ふ。聖火漸く消へ音楽も亦暗に没し去つた。私達は更に色色の飲物に初夏の良夜を祝福し又明日を約して歸宿した。

明くれば五月八日、日の出と共に砲兵は二十一發の禮砲を放ち、「ベッパホード」の鐘は十五分を間して絶えず鳴つて居る。私は午前九時頃快よき眠から覺め、又軍服を着て十時から行はれる彌撒(Messe)に向つた。到る處の大路小路に群がる群衆を押分けた自動車が定刻前、教會の大玄関に着くさ待ち設けた教會の役員達が殷勤に出迎へて呉れる。昨夜遇つた聯隊長の息子さんも出て来る。此少年は教會少年部の幹事に選ばれて居る。道理こそ彼が行儀正しく謹嚴な理由が解つた。歐洲中流以上の少年達は「人はパンのみにて生くるものに非ず」さ深く考へて居る、従つて研學の態度が日本現代の青少年さ大分違ふ様である。日本は明治から大正にかけて西歐の形而下の事計りを輸入した。今や其内面生活に觸れなければならぬのでないか。感慨に耽り乍ら此少年に導かれて御堂に這入る。内部は又一きわ神神しい輪奐の美、莊嚴の藝術、「ジャンダーク」に關する繪畫彫刻は極めて多い。殊に聖像の前面には軍旗を捧けた「ジャンヌ」の像を安置して之に花輪を捧けて居る。司祭、聖歌隊、あらゆる教職達が夫夫配置に就いて既に勤行に勉めて居り、參列の男女は禮装して、さしもに廣い御堂に充ち満ちて居る。將校の爲には中央の最好位置を配當し何れも最近の戰功を誇る勳章厳めしく早や武儀を正して着

席して居る。私の爲には將官達の傍に席を準備してある。圓頂の直下、説教壇の直下であるから参列者の注目をひく、殊に他の將校は空色の禮装、私達が「カーキ」色で特異の軍服であるから嫌に目立つ。然し翌日の新聞は筆を揃へて私の事を書いた、日本帝國の軍服を着し勳綬を佩て彌撒に列した事は餘程市民の好感を惹いたらしい。是以來見知らぬ、年輩の紳士達が途中やカフェーで私に敬禮する様になった。此邊にも亦「オルレアン」氣質が窺はれる。



「バイブル」を読んだ丈では想像だもつかない杯を考へて見る。折から神前に大「オルガン」の音が起り聖歌隊の讚美歌合唱が始まる。此聖歌隊は祭典の爲態態巴里から來たものである。實際巴里の「ノートルダム」の聖歌隊の如きは巴里人の誇りであつて宗教心からでなく態態音楽を聞く目的で参詣するものさへある。次で「ジャンダーク」の爲の讚美祈禱があつて愈々當日の呼物たる「ストラスブル」の「エベック」監督「ルック」上人の説教に移る。

暫くするに軍團の参謀長が参謀肩章厳しく、楚楚たる禮裝の軍團長夫人の御供をして一般参列者の座席を回り獻金を集める。私達軍人席へは緋の衣を着た坊さまが、中世紀の騎士其儘な軍装をし大槍をつき鳴しつゝ扈從する警護者を從へて、同じくお賽銭籠を捧けて通る。巴里でも數回此彌撒に列したが今日の様に現役將校が隨兵となる事はないが何時でも此中世的騎士が出てくる。一體「カトリック」は祈禱書の餘白に描いてある裝飾畫でも殆ん悉く剣戟甲冑であるし戦死者の氏名は必ず教會の石壁に刻まれ各戦役の軍旗も祭られてある。實際彼等は全く愛國者である。併し英獨の「プロテスタント」も亦決して之に劣るものではない。之れでは「ソビエツト」が極力基督教を排斥するのは無理からぬと思はれる。こんな愛國的の事は勿論「バイブル」に書いてないから

緋の衣を着、黒い頭巾を戴いた五十五六の人は先づ默禱の後朗朗たる音調を以て「アルサス、ローレーヌ」の救主ジャンダーク」なる題下に慷慨激越の演説をなした。私は敢て演説を云ふ。夫は説教云ふには餘りに國家主義的であり餘りに時事的であつた。私の臆けなる記憶によれば其梗概は次の様なものであつた。蓋し「ストラスブル」は即ちアルサスローレーヌの首府でありジャンヌは元來ローレーヌ人である。

千八百七十一年「フランクフルト」條約の結果「アルサス、ローレーヌ」は心ならずも獨逸に屈從を餘儀なくされた。併し此年迄「ジャンダーク」の兄弟であつた、我等は決して獨逸に服從を肯じなかつた。持てあまたした「ヒスマルク」は從來の抑壓政策をすてて我等に云ふた。「私は君の親友である。君には自由を與へる。君は私の Organisation を學べ。私の哲學を聴け。私の科學を習へ。私の大學に入れ」。かかる甘言も好餌も遂に我等の心を動かす事が出来なかつた。我等は常に敵に對し第一線に立つて居る云ふ感じを抱いて來た。然し到頭時が來た。四十三年目に花咲く春が來た。(註、千八百七十一年から千九百十四年開戦の年迄を指したのである)我等は再び自由の身になつた。我等は遂に解放された。ああ「ジャンダーク」こそは我等の救世主であつた。彼女は自由の女神、愛國の軍神、今次大戰に於て佛蘭西の將士は何が爲に聖徳の如く勇ましく戦つたか。彼等は實に背後に「ジャンダーク」を認めたのであつた。彼等は三色旗の白部に彼女の軍旗を見出した。(註、紅白青の三色旗は佛の軍旗、「ジャンダーク」の軍旗は純白である)彼女は彼等の墮壞の夢にも這入つた。かくして彼等は如何なる惡戦苦闘をも sports の様に考へ少年の様な輕い氣持で敵陣に突撃し、絶へず「アルサス」の空なる教會の圓頂を望み「ジャンダーク」の像を「ライン」の流に視せんと願ふの外はなかつた。ああ今日得たる「アルサス、ローレーヌ」の自由、彼女が不斷の祈りに依つて神の恩寵を獨占した様に我等

も此半世紀斷えざる祈りを續けて今日の解放を得たのである。ああ聖「ジャンダーク」、あなたは依然として祖國の爲に其祈りを續けて下さい。そして愛國の精神を擁護し國家を危くする「エゴイズム」を打ち破つて下さい。終りに「メツツ」「ストラスブル」の「カトリック」教徒の願を聴いて下さい。彼等の子弟は今や神なき學校に學ばんぞしつゝあります。おお救主、獨逸の壓迫の下にありし日も尚、其心を佛蘭西に住まはせた我等は今も尚其宗教を捨てませぬ。今も尚其愛國心を失ひませぬ。後段の一節「メツツ」「ストラスブル」云云は現時の「エリオ」内閣が兎角宗教に冷淡で、殊更宗教心強き此新附の二州の學校から宗教教育を取り去らうとし二州民の激烈な反對を受けて居る際であるから上人は遂に之に言及したのである。今の政府は急進社會黨であるから、こもすれば宗教家、そりが合はないのである。併し此演説を聞いた若い將校達は多くは之に共鳴して時事の日に非なるを私に對して述懐して居つた。再び起る大「オルガン」の音に來衆一同胸に十字を切つて退散した。「フールス」中尉は其同僚の一青年士官と共に私を誘つて又自分の家に引ばつて行く。夫は午前十一時四十五分から大行列が教會の廣場に勢揃をして市内を練り歩くから、之を同家の三階から見物しやうと言ふ譯である。中尉のお母さんも教會から歸つて來る。外に二三の人もやつて來る。又色色御馳走になり乍ら此絶好の位置から見物する。昨夜違つて白晝の事であるから凡て

手に取る如く見ゆる。

定刻が来た。砲兵の號砲を合圖に異様にして古風、華麗にして温雅。軍隊は市民との混成。

男女老幼「オルレアン」市民の悉くを竭した。思はれる程の大行列が我等の眼下に繪巻物を繰りひろげた様に展開される。實際昨夜までつて今日は此三階にも餘り御客が来ない。恐らく大部は行列に参加したのであらう。私も始め希望なれば此行列に這入つて宜いこの事であつたが這入れば全般が見へないのさ少し思ふ所があつたから謝つた次第であつた。

先づ先頭に乘馬の憲兵が先驅をする。續て乗馬の喇叭手鼓手。當〇アール州やオルレアン市の吏員、市の音楽隊が夫夫特有の樂を奏し乍ら歩調を合せて隊伍堂堂前進する。續て各種の團體が夫夫國旗を掲げて行く。其中には「オルレアン」傳書鳩協會、消防隊、體育會、男女の學校生徒、在郷軍人團杯が目につく。

在郷軍人中、取りわけ千八百七十一一年役の戰友會なる特別の團體がある。何れも六七歳、獨佛戰爭生残りの古つはもので勳章を燦めかして、勇姿堂堂闊歩する。成程之れ丈でも當年の「オルレアン」が如何に佛蘭西に貢獻したかが窺はれる。更に陸軍の徒歩の鼓手、喇叭手、軍隊隊が勇ましい樂を奏し乍ら前進する。代つて「オルレアン」の民間音楽隊が華かな樂を奏する。凡て是等一般市民と軍隊とが交錯し一様の音楽に依つて一絲紊れず行進するのは敬服に堪えない。日本では軍隊以外の團體の行進は葬式の行列と選ぶ所はない。其辭口先で自由だの、酢だの蕪蕪だのこ仰つしやる。殊に此等の行列は軍隊式でなく各人の距離間隔共一步位に開いたまま行進す

るのであるから偉いものだ。市旗を捧げた消防隊を前にして「オルレアン」市長は助役と共に

行進する。市會議員等が来る。次で軍隊隊を先頭にして大禮服を着た州知事書記官等が来る。之に續て軍團長師團長旅團長杯皆徒歩で来る。其跡には聯隊長や地方の文官が仲よく入れ交つて行進する。是等の人達は三階の我我に對し微笑しつつ會釋して行く。私達も之に答禮する。官吏達の行列がすめば愈々宗教團體である。之は例の通り目の覺める計り美しい。白衣赤袴の少年少女の一隊もあれば白帽黒衣の尼僧の大集團もある。垂直に立てた旗もあれば、水平に引つ張つて行く大旗もある。就中妙齡の處女の行列が多い。見物の中にも女が多い。尼僧團の直後にあつて一きわ高く掲げられた旗に對しては群衆悉く拍手脱帽する。之れこそは昨夜市長から教會に渡した「ジャンダーク」の軍旗である。昨夜は暗くて、よく見へなかつたが、今日はハッキリ分る。白い長い旗で一面に百合の花模様を散らし一隅には「エホバ」の神像と「サン、ミシエル」「サン、ガブリエル」の兩天使像を描き中央には Jesus, Maria と大書してある。

彼女が「サン、ミシエル」を守護神とし焚死の最期に「イエス」の名を呼んだ事を想ひ起す。旗に近く「メツツ」「ストラスブル」の監督が進む。其跡に堂堂として練つて行くのは當「サンクオア」の「トウセー」大僧正である。年齒六十計り白髮童顏の高僧である。大僧正に對しては街道の群衆も階上の見物も一齊に拍手して敬禮する。私も中尉達と一所に拍手する。大僧正は一一叮嚀に之に答禮する。我我に對しても態態仰いで手を打ち振り、にこや

かに會釋し乍ら落ちつき拂つて進んで行く。

其後方には「オルレアン」Sports 連盟の一團が後衛となり、更に其後に乘馬憲兵が殿をする。此行列は市内の主な町町を練つて遂に市役所に到りそこで「ジャンダーク」の旗を大僧正から市長に返還するのである。私は「フールス」家を辭して旅館に歸つた。

午後は生憎雨になつたが今度は純然たる陸軍のみの儀式であり、私も公式に招待されて居るから午後三時頃から、市の中心「マルトア」の廣場に行く。此廣場は千八百五十五年名工 Eoyatier の作になる「ジャンダーク」の大紀念像がある。「ジャンヌ」が戰勝つて成功を神に謝する爲三節の敬禮を天に對し行ふて居る騎馬像である。臺座には「ジャンヌ」の一代記を浮彫にしてある此鑄像は巴里「リポリ」街の槍を捧げた金像と共に美術上重要なものだ相である。然し私は之等よりも「オルレアン」市役所の庭にある、長劍の十字を確に胸に抱き默禱に耽つて居る la princesse marie Thérèse の作に成る紀念像を愛する。但し之は私の東洋人的性癖の然らしむる所かも知れない。此銅像を取り巻いて來賓の爲特別の觀覽席を作つてある。茲丈は雨に濡れない様に出來て居る。私の來たのを目敏く見付けた衛戍憲兵隊長は親切に私を設けの席へ案内する。私の隣には州の視學官が來て居つて私に對し極めて親切に世話を焼いてくれる。私の歐洲旅行中一番親しかつたものは勿論第一に軍人であつたが、第二は教育家であつた。事實、歐洲では軍人、教育家とは兄弟の様な關係を持つて居る。趣味嗜好思想に共鳴する點

がある、見ゆる。暫くするに市長が来る、州知事が来る、大僧正が来る。皆空を仰いで生憎の雨で軍隊に氣の毒だ云ふ。頓て「ロアル」河畔から喇叭の音が響く。續て軍隊が聞える。オルレアンの軍隊隊は巴里の軍隊隊と一緒になつて紀念像の側に停止する。此巴里の軍隊隊は「バスチーユ」の歩兵第四十六聯隊に屬するもので嘗て私が巴里で此隊を訪れた時全隊が整列して私の閱兵を受け「君ケ代」を奏した隊である。「オルレアン」の今私の附いて居る隊にも軍隊隊はあるが（佛蘭西では軍隊のある隊とない隊がある）之は田舎丈に「君ケ代」を知つて居らぬ。

軍隊隊のあそこには總指揮官第五軍團長が幕僚を從へ駿馬に跨つて颯爽たる英姿を「ブラー」に現はす。群衆は「ゼネラル」「ゼネラル」に大呼し拍手脱帽する。さ午前の大僧正に對すると同じ、但し軍人に對する大僧正に對するよりも一層元氣がよい。多少荒つぽい感じがする。私は此際間宗教家と將校とを尊敬し得る國民は幸福だと思ふ。

此荒つぽい群衆の歡呼に答へる軍團長の挨拶も亦、大僧正に比べると可なり荒つぽい。いきなり馬を跳らせて陣頭から離れ雨の廣場を疾驅して一一答禮する。おしまひには軍帽を脱いで高く捧げ之をふり回し乍ら馳せて行く。

我我來賓席の前では手綱捌きも鮮かに馬を駐め大聲に簡單な挨拶をやつた。其輕快洒脱の態度は、とても六十以上の老將とは見ゆ。確に十歳計りは若く見ゆる。一體歐洲人は各方面共大器晩成の代り日本人に比すれば年より遙に心身共に若い様である。然し此將軍は又格別である。私の後で「ゼネラル」は中中勢

力家です。ね杯を囁くものがある。此時早くも聯隊の先頭に徒歩で行進し來つた衛戍諸隊の軍旗は夫々旗手少尉に捧持せられて紀念像に面し整列を了つた。軍團長は之を見るや直に又馬を驅つて軍旗隊の中央前に進み軍樂と共にジャンダークの像に對し三節の敬禮をする。眼を放ては銅像の「ジャンダーク」も亦之に對し同じく三節の禮を交換して居る。ああ美はしき女武者、生年僅に十九歳の騎士は、六十歳の老大將と敬禮を交換して居る。何と詩の如き情趣よ、畫の如き光景よ。五百年の時の流れも佛軍傳統の精神を消滅するに至らない、否、歳を逐ひ難を關する毎に益強く濃くなりつつある。銅像の彼女は今にも會心の笑み、溢れん計りに見ゆる。軍團長の老の眼に光るは涙か雨か。私は此場面を忘れる事が出来ぬ。

敬禮了つて軍團長と軍旗隊とは銅像の側面に位置する。續て全オルレアンに衛戍諸隊は聯隊のまま分列行進を行ひ逐次に像に對し注目禮をやり乍ら通り過ぎる。「ドワートル」中佐も歩兵第三百三十一聯隊を率ゐる堂堂として肥馬に跨つて來る。昨夜家庭で見た好好爺とは別人の感がある。續し工兵、歩兵、騎兵、砲兵、或は馬に跨り或は砲を曳いて隊伍整整歩武堂堂分列を行つた。而して此等の隊は單に此「フランス」計りでなく市中目貫の場所には皆練り回りは、直接市民の玄關前に行つて交驪する譯である。かかる方法は軍隊と社會とを結合する爲有利であるを考へた。

陸軍の儀式が了つた後市中では各「フランス」に色色の催しがあり、殊に午後九時には禮砲と共に「オール河畔に仕掛火花杯があつた

相であるが私は雨の爲見に行かなかつた。午後十時になるに、例の「マルトリア」の廣場で最後の解散式を行ふた私は之を見る爲、廣場の一隅にある將校俱樂部に招かれて行つた。

既に大分將校や其家族達も來て居る。私は「バルコン」に出て見物した。各隊の旗手喇叭手で編制したもの軍樂隊と丈が例の銅像前に集り大祭の終了を布告するのである。夜既にふけ「イルミネーション」の花輪に圍まれた乙女の像に對し一種悲壯なる離別の哀曲は昨夜の教會の聖火と相俟つて終始一貫し極めてふさはしいものであつた。祭典は之で了つた。今更冗冗しい議論をするのを休め其後「オルレアン」を出發する間際に此地で懸意になつた或老婦人——堅いカソリックのお婆さんが私の留守に旅館へ來て美しい「ジャンダーク」の「アルバム」を私に贈り其際之に添へて置手紙をして行つた、其の全文を茲に譯して結辭とする。

火曜 六月二日

親愛なる大佐殿

私は昨日あなたに御目に掛かることは思ひませんでした。ほんまにあれが私達の最後の御別れで御座いましたね。私は兼て御約束致しました通りあなたに此小さな贈物を致します事を御許し下さいませ。私は今茲に之を持參致しました。そして或は御目にかかる事が出来ませんか存じ此手紙を差し添へました次第で御座います。此アルバムは取りわけあなたのお子達に御覽に入れたいので御座います。あなたは此繪に依つてお子達に偉大なる將軍であり純誠なる女傑 (heroine) であり私

共の愛國の聖徒であつた所の私達の小さな愛人 (notre petite bergere) の物語を教へて御上げ下さいませ。

あなたの可愛いお子達は、お父さまが一ヶ月間お出になつた市(註、オルレアン市の事)の事をお考へになります時屹度なつかしく感ぜらるる事と思います——あの大きなお寺、其處でお父さまが五月八日の御祭に御參列なさつた時さんなにか此土地の人から注目をお引き遊ばしました事でしらう。

あなたは御子達に御塔の「イルミネーション」を説明して上げて下さいませ。あなたは屹度深い深い感銘を御受け遊ばした此お祭の事を繰返して御考へになりますらう。そして屹度あなたの小さい人達にも其御感想を御傳へなさいます事存じます。何故なればあなたは個人的に色色御受け遊した紀念すべき事柄や、凡ての御感激を十分御記憶に御止めなすつて居らつしやいますからです、殊に其凡ての御記念や御感激やは、あなたの御天性でおりなさる所の繊細な御情操 (la delicate nature de votre coeur) に依つて十分御補飾御演繹遊ばす事私は考へますからです。

親愛なる大佐殿 此御粗末な本は決して良いものでは御座いません。併し私は之をあなたの可愛いお子さん達に差上げたさいふ喜び。唯それと私は満足で御座います。さて、愈私はあなたに「Au revoir」。「まあお目にかかりましたやう」を申上げます。此土地に於けるあなたの御滞在は極めて短かいもので御座いました。然し最もよき、

最も確かな御土産を御持ち歸り遊ばす事を信じます。さうか私は決してあなたを忘れませぬ。さうか夫を御記憶遊ばせ、そして私の眞底からの敬愛の至情御同情の云ひ表はしを御受け下さいませ。

挿繪説明

A、L、

一、オルレアンのカテドラル・サン・クロアに於ける五月七日夜のジャン・ダーク大祭のイルミネーション(第五頁)。

二、五月八日午前オルレアン、ジャンダーク祭に於けるガンベッタ體育協會及びジャン・ダーク體育協會の行進、場所はオール河畔橋上にて背景の市街はオルレアン、右後方がすかに見ゆるはサン・クロアの二塔(第六頁)。

三、五月八日午後オルレアン市マルトリア廣場に於ける第五軍團の分列式、諸隊はジャンヌの記念像に對し敬禮しつつ行進す(第七頁)。

四、Fouquet 作のジャン・ダーク像、オルレアン市マルトリア廣場にあり、第五軍團が毎年五月八日に祭典を営むにより有名な(第八頁)。

オフィシエ・ダカデミーに就て

本學事務理事、教授宮島綱男氏が這般佛國政府から學術勳章 (Officier d'Académie) を贈られたことに就ては、前號及び別項報道の通りであるが、同勳章は棕櫚の葉と月桂樹の葉とを組合せて王冠の形を作つたものであつて、實は銀、紫色のリボンがついてゐる。古來棕櫚又は月桂樹の葉は勝利者或は最高の天才をあらはす象徴として用ひられたものである。而してこの學術勳章はナポレオンが一八〇八年に勅令を以てパリ大學の組織を定めた時併せて制定したもので、その後多少の改革はあつたが、今日では學者、文學者、藝術家等一般學界に貢獻した人を表彰するために用ひらるる最高の名譽章となつてゐる。

琉球瞥見記

關西大學講師 田邊信太郎

鹿兒島をたつたのが八月二十七日である。鹿兒島から沖繩へ發航する大阪商船の定期船は三日に一度である。砂糖の出荷期には沖繩からの船腹は滿されるが、平日は千五百噸級の旅客と貨物の併用船で、往復の航路とも船腹は不足である。その上大阪那覇間の直行定期船が開設されて以來、沖繩縣と他府縣との貨物の移出入は、大阪との直接取引によつて鹿兒島を経由しない爲に、沖繩縣に對する鹿兒島の販路上の獨占的地位は、それ以來維持が出来なくなつた。もとより鹿兒島の築港が不完全な爲に、直行定期船が寄港出来ない爲でもあらうが、假令その程度の築港が完成されたとしても、果して移出入の貨物の幾何が、鹿兒島を経由するかは疑問であらう。舊藩時代薩藩がその好箇の財源とし、明治年間を通じて鹿兒島が維持してゐた沖繩縣の移出入貨物の獨占は、既に經濟史の事實となつてゐる。舊藩時代薩藩は、沖繩をして對支貿易の仲介者たる地位にたため、且つ沖繩産の黒糖移入を獨占し、琉球藩に對して苛重なる貢租を課して藩の財政を露してゐた。徳川時代から明治年間を通じての大阪に於ける砂糖組合の取引制度は、それに關聯して興味があり、殊に薩藩が沖繩の黒糖生産に施した峻嚴なる政策は、マーカンチリズム時代の殖民政策に髣髴たるものがある。

二十七日の午後五時に鹿兒島を解纜した安平丸は、二十九日の午前八時頃に那覇に入港した。那覇に着港する前日の二十八日の晝近く

に、大島の名瀬に一時間ばかり寄泊する。鹿兒島への復港も同じやうに寄港する。丁度航海中は二晩とも、十三夜頃の美しい月夜であつた。屋久島から鬼界島まであたりの七島灘と呼ばれる難所も、月光で晝のやうに明るい上甲板の藤椅子に身體を投げて、夜の更くるをも知らず、愛喫の香煙を薫しながら、若い船員が快活に語る異邦の物語りに耳を傾けるには、却てふさはしいほどの波の静けさであつた。それはフイジイ、サモア等の南洋諸島を航海した時のことが主であつた。

私は乗船してからは主に甲板に出てゐた。三等船客には紡績會社に勤めて沖繩へ歸郷する女工が數十人居て、月夜の下に歌ひ、語り、私語き、甲板をそぞろ歩きしてゐた。私はその言葉を聞きそりたと思つたのである。琉球語が日本古代の言語の變化したものであることは、チャンバレンの研究を引用するまでもない。日本書記の「息(イラス)は、貸すの古語で、沖繩の方言ではイラスン(貸)イラユン(借)となつてゐり、地震はナイ、肉はシシである。岩崎卓爾、伊波普猷兩氏の論著は、琉球語の研究者に好參考となるであらう。

しかし目に見る文字に書かれた言葉に理解される點があつても、耳に聞く言葉としては、長い時の距りとその間のお互ひの自分自分の恣な便宜が、全く見當もたないものにしてしまつた。

甲板の女工達は語り合つては、歌を合唱する。三年なり四年なり離れてゐた故郷を思慕する思ひは、その喜びのやりごころを歌に求めるのであらう。それは蛇皮線の沈んだ音色に、合はされる歌かも知れない。が中には耳に聞

き馴れた俗謡も混へられる。

沖繩で蛇皮線は、男の弄ぶ音器である。蛇皮線を弄ぶ女性には、ズリと呼ばれる娼婦のみである。若しその蛇皮線の音色を聞かうとするならば、那覇の市中の夜、小暗い小路を歩けばよい。低調なその單調な歌ミ、三味線ミ異つて冴えない、沈鬱な靜かな音色は、青く淀んだ古池の溜水に小礫を投げたそれである。私は以前滿洲のある町で、ある月夜に黄色い窓掛のかかつた二階から洩れる胡弓を聞いたことがある。それは天に訴へるすすり泣きである。蛇皮線はそれ程強く主張しない。神經的でもない。何故か私には胡弓よりも太い大味なものと感じられる。蛇皮線の皮は南洋からのものである。私の買つてきたものは、現に使用してゐる形式が、三味線よりは小形であるが、久高島で見た古代の琉球の三味線は、他府縣の三味線よりも形は大きく、皮も蛇ではない。三味線が支那からの直接の輸入であるとする津田左右吉氏の説よりも、支那から琉球を経由して輸入されたとする通説を探りたく思ふ。

八月の中旬の三日間、産業課の技師新里順正氏が、中頭郡の二三村を同導して下さつた。

越來村で夕暮になつて、嘉手納へ出る途中で日が暮れてしまつた。緩かな丘陵を下る街道の傍にある田舎家から、洩れて来る蛇皮線の音色は、思ひに沈める私語である。それは激しい感情ではない、かこちの獨りごころである。しかし民謡ミ蛇皮線は、田舎の唯一の娯樂である。女工達が歌ふ望郷の思慕のみではない。毛遊びは、普通仲の好い五六人から二十人位までの若い男女によつて行はれる。それは良

い月夜が選ばれる。ひろびろとした丘陵の草上で、月光を浴びつつ、泡盛の盃をこり交して、歌を唱ひ、蛇皮線をこれに合して踊るのである。夏の頃には一字又は一村が合併して踊るさいふこころである。園頭郡の羽地村を調査にいつて、郡長竹崎米吉氏、郡視學玉井清廉氏、稻嶺小學校校長山城宗雄氏、同教員鳥袋源七氏等に御世話になつてゐる時分、名護町では組踊の催しがある爲に、町の人人は、その準備に忙しいさいふこころであつた。組踊の踊の上の約束は厳しいもので、その稽古に多大の日數がかかるさうである。因に竹崎氏は本學の出身であつて、郡の調査書類の閱覽を許され尙その抄寫を頂いたことをここに謝する。稻嶺小學校では晝飯の御施待を頂いた。

歌ふこころ踊るこころは、感情の最も自然な、計劃的でない表現の形式である。女工達の歌ふ歌は、その歌の言葉が何を意味するものであらうとも、その喜びの感情の發露であらう。この定期船によるならば朝飯の饅頭頃に、沖繩本島が見えはじめる。沖から見た沖繩本島は低い隆起である。鬼界島が殆ん正三角形である反對であつて大島は丁度その中間であるといへる。渡嘉敷巖君の話によると子供の時分波上神社附近の干潮は、今よりも深かつたさいふこころである。玉井氏の話によると、勝連半島附近の環狀の珊瑚礁は子供の頃よりは、その環狀を表してゐる諸小島間の干潮が淺くなつてゐるさいふこころである。中城灣は最近海軍省によつて調査されたが、十年前調査の時の灣底の状態に比較する著しい變化があるとの話も聞いた。さすれば近年沖繩本島は隆起しつつあるのであらう。琉球建國の

物語に、アマミクが天より降つた時、「南海ノ浪ハ北海ニ打越シ、西海ノ浪ハ東海ニ打越シテ夫々島トハ不成ケリ」といつてゐるのも、必ずしも根據のない無稽の一通話として葬ることを許さないものがあるのではないだらうか。若しこの假定を認めるならば、島尻郡の富名越なる地名は、日本の古代に逢坂で行つた方法のやうに、一方の海岸から岬を迂廻して陸地を越えた反對側の海岸へ、船を漕でゆく勞を避けて、船をかついで陸地を越え反對側の海岸へ出た地點とも考へられる。その頃この方法が容易く採られる程、その陸地の距離は短いものであつたのではないだらうか。この遠い記憶に根據を與へるには、その隆起についての科學的研究が必要である。

那覇の埠頭から見える三重城(ミエグスク)やヤラザの森は、倭寇や疏友交通史にからまる物語を回想せしめる。八拾萬圓を投じて作つた築港は、着島第一に初めて沖繩を見る者をして驚かしめるものである。しかし棧橋に並ぶ日傘と淡い蔭色の琉服の姿は、物質的文明の普及とは異つた異國情緒に、三日の單調な航海に倦怠した心が慰められる。白い夏服を着て棧橋に下りた自分の姿も、南國といふ心なしが、くつきり強い影を投じてゐる。荷物のこゝを旅館の出迎人に頼んで置いて、俤に乗る。言葉が解らないので、ただ檣原といつたばかりで二の句がつけない。兎も角も間違ひなく檣原へ着いたことは確かである。首里と那覇とは女子師範の村上清造氏に案内して頂いた。首里の商家では百名氏の案内で庭園を見せて頂いた。兎に角暑い日で、首里の圓覺寺及城趾を一通り見て、識名園へゆく

には、汗が額からこぼれるやうに流れた。日光の直射が強いせいか、丁度立山や白馬や、槍ヶ嶽を學生時代に歩き廻つた時のやうに、手の甲や顔の皮膚がビリビリと少し痛い。しかし風は極めて涼しい。石の疊まれた琉球特有の道は、靴では歩き難い、寧ろ赤靴の方がよいやうである。識名園は商家の別荘である。私の最も好きな建物は、崇元寺と圓覺寺であつた。

女子師範では、城間隆榮氏川平朝令氏に御世話になつた。川平氏は嘉平納の農林學校の眞境名安興氏と共に一般通史について造詣が深い。眞境名氏の琉球一千年史は琉球史の一權威であらう。尙島袋源一郎氏の國頭郡誌も精細な苦心の著作である。産業課長の田村浩氏は、交際議論し合つた。氏の奥村の共同店に關する小論述は、好參考資料であり、首里市長の仲吉朝助氏は、三十六年の土地整理時代、自らその掌に當り、隨つてその史料の蒐集も廣汎である。兩氏共に特に地割制度に興味をもち、研究中なる同好の士である。田村氏は南風原に同導して共に調査した。

しかし私の目的とした久高島へいつたのは九月の末である。天候が定まらなかつたり、史料を集めたり、國頭郡や、中頭郡へいつてゐて意外に遅れてしまつた。實は久高島はさうしけしけ人のゆくところではないのである。沖繩で生れた沖繩の研究家でも、ある機會に一度位行つたに過ぎないのである。私も歸阪の日が迫つて來るので僅か一日行つて、大體の模様を調べたに過ぎない。朝六時の那覇發の汽車に乗る。陸地を横斷して東海岸の與那原に着いた。與那原はその附近の中心地で旅

館もある。一體沖繩縣を旅行するに困難なのは、旅館の點である。嘉平納へいつた時には臺南製糖の俱樂部へ泊めて貰つた。名護町では旅館があつたが羽地村にはない。さういふ苦勞は豫想のつかないことである。久高島へ行くのも日歸りの計畫であつた。與那原は中城灣に臨んだ町で明け方の靜かな海は、パンミ手帳と蝙蝠傘をもつた、ねむさうな私の目を喜ばせた。學校へ通ふ中學生が居たので道を訊ねて、馬車の駐車場へゆく。馬車屋が既に馬をひき出すところで、外の家ではまだ戸も開けて居ないのが多い。

動き出す、石ころ道なので馬車が無暗にゆれる、窓框につかまつて居ない頭をうちつけるか、ふいにごつりきて首のつけねがくるつたやうに痛いが、兎も角不愉快である。しかし雲が切れて、朝のすがすがしい太陽が

てり始める、海に沿つたこの街道の眺めはゆるゆる馬車の不愉快さを忘れしめる魅力がある。月の上旬に那覇から名護へ七里の間自動車にゆられたことがあつた。道は仲泊あたりから海に沿つて、靜かな波は遠淺の干瀬を疊んでくる。小砂の濱邊に思ひもかけぬ大きい龜のやうな黒い岩がころがっている。珊瑚礁岩がその脚部を侵蝕されて、指で一押しおせば美しい濱邊をころがつてゆきさうに丸くなつたのである。七里の道は縣道ではあるが、月の初めに五日ばかり續いた時化に、さういふところ壊されてゐた。私は軟いこの穏やかな海景を恣にあかす眺めたことがあつた。那覇原から知念村まで三里の街道は、この那覇から名護への海景とは異つた眺景である。自然の風景の外にこの海岸には人文的な部分が多

分に混へられてゐる。自然と人間とがよりよく融和されて、濃やかな親しみが見られる。

琉球の南部地方今の島尻郡、殊にその東海岸にある知念、玉城等の村は、琉球の建國史の第一頁に現れる地方である。琉球で人間の生活は先づこの地方に初まつた。その遠い文化の傳統は、人間が自然に威壓せられるとか、人間が自然を征服するとかいふ人間生活と自然との争闘觀念が消滅して、人間が自然と親しみ合へるやうになつたのであらう。人間の群居する村は、自然と特に對立してゐないで、自然の中に生きてゐる。そこには麗かな太陽と、靜かなる海洋と、他の二郡に比しては天與の豊かな物資の恵みが見られる。

佐敷を過ぎる、馬車は小丘を登る坂道にかかる。禦者に手綱をさられ、私一人を乗せた馬車は、あへぎあへぎ、途中一二度も休んで坂をのほり切る。石門のやうに兩側に峙つた切り通しの間から、かいま見る風景、それは脚下から急斜面を作つて擴りゆく甘藷と甘蔗との段段畑、その間に點綴されて疎なる木立あれば必ず村の人家あり、延びて展開する丘陵のはては兩腕でかかへるやうに灣を抱き、くづれる靜かな波頭は、目下に見下す遙かなる海岸に沿つて、白い繊細な美しい曲線をおしけもなく引いてゐる。

茫茫たる太平洋は朝八時の強からぬ夏のうるめる光をうけて、銀灰色に鈍く光り、光の中に

静けさを守るやうに見える。馬車はこの美しき下瞰圖を見下すには丁度適好の地點である丘陵の、殆んど頂上近くをうねつてゆく。道のうねりは展開する風景をさ

まざまにかへる。朝のこゝであれば一もこの木の影も長い。甘藷の葉は斜に光をうけて銀のやうに鋭く閃く。平和なるこの朝の空氣に、音をたつるものは、馬の蹄の音、馬車輪の軌るそれである。それも高らかな空にほがらかに聞かれる。

風景が小丘にかくれる。知念村の村役場の在る久平堅にはいつたのである。草の茂つた石垣をめぐると役場である。役場の前の草原にはまだ露が深い。若い吏員の方が日曜にも拘らず私を待ちうけて居て下さつた。村長の新垣孫一氏もやがて出て來られた。氏は久高島に七年許り居た方である。結婚制度や、土地制度や、いろいろの村の状態をお訊きした。

船が用意されてゐる。船は剝舟で、剝舟が進化したものである。大木の中をえぐりこつて造つた丸木舟が、三枚の板で底が丸くつぎ合され。つなぎ目を蟻の脂ですりつぶした剝舟となつたのである。少しの波にも轉覆の虞がある。柳田國男氏も大阪毎日の活動寫眞隊も久平堅までは來たが、少しの波に阻まれて久高島に渡るこゝが出来なかつたさうである。時による、久高島の人其那原へ買物に來て、半月も歸島出來ないこゝがあるこの話である。久高島、沖繩本島間の交通機關は、この剝舟の外にない。私の爲に用意された剝舟は、知念村の村有船で、隔日に郵便物を久高島に運送する船である。その日はその定期の出帆日でないにも拘らず、特に用意して下さつて、身體の動きがされないほど狭い船中に蘆を敷いて吏員の方を肩を並べて席をまつた。

快走する。その日は稀に靜穩な日であるといふ。少し波があるが飛沫でびつしよりぬれる。これは船頭の話である。轉覆の危険の多いこの剝舟は、手馴れた船夫には却つて便宜である。轉覆したならば、船夫は海に落ちるが、船につかまりながら、亦覆してもこの位置にするのが容易であるからである。

海上一時間半にして船はトクジン濱に着いた。久高島は周圍一里十八町の絶海の孤島である。戸數百四十四戸、人口七百九、男三百四十一人、女三百六十八人である。今は知念村の久高といふ小字であるが、舊藩時代は久高村と外間村とに分れてゐた。ノロといふ神官は、久高と外間とにゐる。ここには外間といふ屋號の舊家があつて根人(ネンチュ)である。根人は私の考へでは、土地の最初の開拓者に當る。一體久高島はアマミ最初の開降りの地とされてゐる靈地である。以前には歴代の琉球王は自ら毎年禮拜の爲に、この島に渡航したが、後には代理を派遣した。

島には小學校がある。在籍兒童數六十四名は訓導兼校長である神谷明力氏の調査である。氏の宅で晝飯の御馳走になつた。區長さんと呼んで來て頂いて、私は面倒な質問をしたが、神谷氏の通稱で、區長さんは一快く答へて下さつた。この三人連れに村の吏員の方を加へて、一行は根人の宅やノロの宅を訪ねた。ノロはやはり曲玉をもつてゐるが、模造品である。これは舊時琉球政廳が行つた政策によつて、眞物は皆模造品に取替へられた。名護町の東方にあるナングスクのノロのも模造品である。曲玉で有名なのは今歸仁(ナキジン)のノロのものである。曲玉はノロた

る資格の證據となるもので、南風原でも越來でも私は訪ねた村で、ノロの曲玉を見せて貰つた。根人の宅には、按司(アンジ)といふ役人の着用した着物が残されてゐる。素地は支那の緞子のやうである。水色の地色に赤で太陽を、白で雲を皆繪具で描いてあつた。珍らしいものである。模様も極めて簡單な原始的なものであつた。

畑を廻つて、蒲葵(ビロウ)樹の茂つた神谷原(カペール)を見た。カペールはアマミクが始めて住んでゐたミウミ言ひ傳へて、そこに茂つた蒲葵樹は、落ちた枯葉も採らないこゝにしてゐる。この蒲葵の樹は、今では他府縣には殆んど見當らないさうである。しかし紀伊國續風土記による紀州にも産してゐたことが知られる。延喜式の時代には蒲葵で飾つた車が流行してゐた。笠や團扇にも造られてゐた。伊勢の齋宮でも毎年御座所の料として、此葉を二枚宛乞ひ請けられたと語られてゐる。蒲葵の扇の圖は國史大辭典の修驗道の條に見られる。昔尊貴の方の御飯をさます爲に用ひたこの蒲葵の扇との間には、何か關係があるらしくも思へる。

神谷氏の宅に歸つたのは五時頃であつた。區長さんにもいろいろ御世話になつた。久平堅の知念村の役場へ歸つた時には日が暮れてゐたので、新垣氏の御好意で役場に泊めて頂いて、翌日那覇へ歸つたのは午後三時頃であつた。

琉球に滞在した約一ヶ月間の見聞によつては、私に琉球は社會發達史の一縮圖のやうに思へる。現在でも沖繩縣の社會組織には、血縁關係に基いた團體生活が、まだ重要な要素

として残つてゐる。しかし一方に地域的團體生活が經濟組織の重大な役目を務めてゐる。そしてその地域的團體生活は共同社會である血縁關係の基礎にたつ共同生活は門中(ムンジュウ)であり、地域的共同生活は與(クミ)である。與が製糖事業や建築等の場合の共同作業の單位であるに反して、門中は必ずしもかかる事業に關して共同作業を行ふものとは言へない。古來最古の社會の舊慣が遺存するといはれる久高島では、門中はただ冠婚葬祭に當つて、喜憂を共にし式典の進行に際して相協力するのみである。

しかし或地方に於ては門中と與との職分は、相交錯してゐる場合もある。故に一言にしていへば、血縁團體から地域團體への推移期になるものである。與には共同社會たる要素が多分にある。個人の住家を建築するに、與の各家が平等に勞力を提供して、協同作業を以てなすイーマールと呼ばれるものの如きは、その著例であらう。道路普請に各與がある部分分を分擔して、各家平等に勞働を提供する國頭郡のある村の規約の如きもそれである。明治三十六七年の土地整理以前に於ては仕明地(シアキチ)ノロクモイ地、オエカ地を除いてその土地の大部分は、一村(現在の字)の共同所持であつた。かかる共同社會の要素の多分にある社會に於て、その個人的な所有慾は自由な發達が阻止されてゐた。土地の一般私有が認められて二十有餘年を経過したに過ぎない。現在の沖繩縣の經濟狀態は、かかる共同社會から利益社會へ、共同社會的の經濟思想から個人主義的經濟思想に轉回せんとする過

學内報

専門部臨時試験施行

昨年十一月二十三日から同月二十八日まで、本學専門部各科各年生共、それぞれ數科目宛につき臨時試験を施行した。

第二學期授業終了

本學各部各學年の大正十四年度第二學期授業は左の通り終了した。

學部各科各學年共	去月二十日限
大學豫科各學年共	同 十二日限
専門部各科各學年共	同 同日限
専門部豫科	同 十日限

大學豫科第二學期試験施行

本學大學豫科各學年共、去月十七日より同二十四日まで、八日間に亘り、大正十四年度第二學期試験を施行した。

専門部豫科第二學期試験施行

本學専門部豫科各科共、去月十四日より十九日まで、六日間に亘り、大正十四年度第二學期試験を施行した。

學部並大學豫科専任教員會

去月二日午後二時半から千里山學舎に於て學部並に大學豫科専任教員會を開催し、教務上に關して種種意見を交へるゝころがあつた。

千里山學會第十四回例會

昨年十一月二十四日午後三時から市内北區堂

島ビルディング内中山太陽談話室に於て、千里山學會第十四回例會が開催せられた。定刻會員約三十名出席、櫻井幹事は開會の挨拶

(上) 遊樂に於ける宮島教授、上方左端の額中は同教授の恩師ジード教授
(下) 宮島教授叙勳祝賀會に出席せる本學関係者諸氏



述、翻譯に關する所感が述べられ五時頃閉會した。尚ほ當會に於て幹事改選の結果満場一致で前幹事櫻井匡、辰巳經世の兩氏が留任することに決定した。

宮島教授 受勳祝賀會

本學専務理事、教授宮島綱男氏が、過般フランス國政府から、その學術上の功績に對し、學術勳章(Officier d'academie)を授與せられたことは既報の通りであるが、その後この慶事を祝福するために、本學教職員有志に依り、又本學關係者(理事、評議員、協議員等)有志に依り左の如く祝賀會が開催



せられた。

本學教職員有志に依る祝賀會

去る十一月十六日午後六時から市内北區中之島大阪ビルディング樓上に於て開催、主賓宮島教授の外に左記四十數氏出席、デザート・コースに入つて、小泉教授は一同を代表して祝意を述べ、且つ該勳章の由來を興味深く説くところあり、次でこれに對する宮島教授の謝辭があつて、後更に各自歡談を久しうして九時半閉會散會した。

出席者(イロハ順)――岩崎卯一、入江眞太郎、板津直俊、岩岸巖、原田鹿太郎、戸田省三、

沖中恒幸、大立目重虎、賀來俊一、河村信一、加藤金次郎、桂忠雄、横卷茂雄、武内省三、田邊信太郎、辰巳經世、田川七郎、坪内士行、中村鄒次郎、中村良之助、村上喜貞、野村吉藏、山村喬、山本順應、松田一、松崎義盛、小泉幸治、佐々穆、櫻井匡、三田直吉、木下孫一、木戸卯之助、水谷揆一、新町徳之、樋口純、森下政一、森川太郎、關豐馬等の諸氏

本學關係者有志に依る祝賀會

去る十一月二十六日午後六時から、市内東區今橋ホテルにて開催、定刻宮島主賓の外に左記諸氏出席、デザート・コースに入るや本學監事山口房五郎氏は一同を代表して祝辭を述べ元來本學が佛法を教授するために起された學校にして、佛法學者が教鞭を取つてゐた關係から言つて、宮島教授今回の受勳は特に因縁深きものと思惟される。更に本學がかくして愈外國に認められつつあることは一層喜ばしいことで、單り同教授に取つてのみならず、本學全體に取つての慶事なればならぬ。願はくば、本學のこの對外的名譽を信用を永く維持し、更に發揚せんために一層同教授の自重を努力を希望して已まぬ

と結び、これに對し宮島教授は

今夕多數の關係者各位に依り自分のために盛大なる祝賀會を開催せられたことをこの上なく光榮に思ふ。今回の叙勳には次の二つの意味があると思はれる、第一は山口監事の御言葉の通り、本學は佛國の歴史的關係が認められ、最近大學としての面目を新にした關係上、自分が代表的にこれを受

けたのであつて、大學全體として名譽を擔ふべきものである云ふこと、第二は、自分が從來學問上に成し遂げ得たる結果が認められたためではなくて、將來大いに努力すべしとの、今後を約せしめる獎勵の意に於てこの心添へを爲されたものと思はれることである。第二の意味に於ては、齡八旬を出でて尚ほ研究に倦まざる恩師ジードのそれに鑑み、残されたる將來を通じ一層努力してこの光榮に酬ひんことを期する。切に諸賢の後援を祈る次第である

旨の謝辭を述べた。
次で講師宮本英脩氏は特に慶祝の意を表して本學宮島氏の發展のために祝盃を舉げ、餘興に大阪商業學校長清水大樹氏から、祝意を表するために派せられたる浪花節の名人の演奏があり午後十時盛會裡に閉會した。

出席者(イロハ順)――井上虎治、池尾芳藏、板垣不二男、岩崎卯一、林龍太郎、沖中恒幸、渡邊菊之助、吉田晋松、吉崎龜之助、垂水善太郎、武内省三、内藤正則、村上喜貞、野村吉藏、黒田莊次郎、山岡順太郎、山口房五郎、松村敏夫、古田吉五郎、安宅彌吉、佐々穆、喜多村桂一郎、宮本英脩、水谷揆一、白川朋吉、下村耕次郎、平田讓衛、菅沼豊次郎等の諸氏

本學教授の學外講演

舊臘十二日、本學學長教授左記五氏は名古屋に出張し、同地に於て、新愛知新聞社の後援の下に學術講演會を開催し、それぞれ頭書の如き題下に講演した。

國際主義と日本 小泉幸治教授
企業者の結合に就いて 沖中恒幸教授

我國産業の前途 松本學長
神さ害惡との關係 櫻井匡教授
大學教育に就て 宮島綱男教授

垂水理事還曆及勤續三十七年記念會決算報告

本學關係者中の有志發起の下に企てられた本學理事垂水善太郎氏の還曆及勤續三十七年記念會の事業は昨年十一月を以て漸く終了した同會の趣意に賛して金員を寄贈せられたるもの一千數十口(一口金額五圓)に達し、同月十六日、左記表彰狀と共に本學總理事山岡順太郎氏が發起人を代表してこれを垂水氏に手交した。尚ほ垂水氏はこれに對して別項の如き謝狀を返呈した。

應募金額(拂込濟)
印刷費其他支出金額
差引贈呈金額
五、三三一・三二
八八六・五九
四、四四四・七二

表彰狀

貴下は明治二十一年關西大學の前身關西法律學校副幹事就任と共に籍を同校に置き同二十四年業を終るや引續き幹事に昇任し明治三十七年江戸堀に校舎を新築し翌三十八年組織を變更して關西大學と改稱し更に現今の福島に擴張移轉したる外同校附屬關西甲種商業學校の創設千里山學舎の新築大學令に依る關西大學の設立等に關し刻苦勉勵以て今日の基礎を確立するに甚大の力を致されたるは關係者の感激措く能はざる所なり
關西大學が貴下に負ふ所上述の如し其間實に三十有七年自己榮達を念を去り生涯の大事を本學に捧げ給既に還曆に達せらる
今回貴下の還曆を祝し並に三十七年間の勤

續を表彰せんがため之を關係者に謀りたるに幸にして多大の金品を寄贈せらるる是れ貴下高德の反映たると同時に發起人一同の感謝する所なり
茲に寄贈者各位の芳名を録し金品を併せて貴下に呈し永く其功績を表彰す
大正十四年十一月十六日
垂水氏還曆及勤續發起人
三十七年記念會

垂水善太郎殿
謝狀

謝狀

關西大學先輩校友並に關係者各位 各位は不肖の還曆を祝し併せて勤續三十七年を記念せんが爲に巨多の金品と表彰狀とを贈與せられたり其の芳情の深厚なる其の文辭の過獎なる不肖の敢て當る所にあらず雖も誠意の存する所謹んで之を拜受すると共に今昔を俯仰して不肖の今日ある全く先輩各位の指導援助に由るを思ひ感激の至りに堪へざるなり

回顧すれば弱冠志を立て大阪に遊學するの初に當り大いに法學振興の急務なるを悟りて關西法律學校創設直後の事に與り且つ勤め且つ學び拮据數年而も時期未だ熟せず以て其の維持經營の困難なる苦心慘愴屢外に職を求めて生活の資に充て時には零財を投じて校費を助け獻身的努力を繼續するの已むなきに至りぬ幸にして漸次發展の運に向ひ明治三十六年校舎を新築し大學の制に改め、次いで擴張移轉の實を擧ぐるを得、此間二三他に職を掌りたることありしも本學經理の事は未だ一日も其の關係を絶たず。然れども身學外に在りては百事周旋意の如くならず、規畫施設其委曲を盡し難きを以

て需に従ひ幾何もなく職を辭して再び學内の人となりぬ、此時に當り一意學運の促進を圖るの外毫も名利の念慮を累はすなく、尚ほ年壯氣鋭殆んぞ心骨を鏤刻するの慨あり今にして之を憶へば恍として隔世の感を生ず。爾來學運隆盛して旭日昇天の勢を現し社會翹望の目的となり後進輻輳の中心となりぬ從つて幾千の偉器を養成し國家棟梁の材を出だすに至つては實に感極つて涙下るを禁する能はざるものあり。

大正元年更に見る所ありて甲種商業學校の附設を企て又千里山學舎の新築大學令に依る大學の創立に至るまで先輩の驥尾に附せしも漸次巨資と博學の士とを要するの秋幸に學德最も高き首腦を迎へられたるを以て爾來事に間接に従ひ老方に至るを忘る。唯非才寡德頗る驚鈍を鞭撻す雖も未だ以て各位の高喝に酬ゆるに足らず慚愧の至りに堪へざるなり。然れども幸に體軀尚ほ頑健にして一片吹歌の念全く灰せず窃に自ら生涯自己の使命に踴躍するの志あり庶幾くは以て深厚なる芳情と過獎なる文辭とに答ふるに至るを得んか。

茲に謹んで各位に對し感謝の誠意を表し併せて所感の一端を陳ぶ尊威を冒瀆し惶懼止むなし 頓首再拜
大正十四年十一月二十五日
垂水善太郎

記念會發起人總代

關西大學總理事山岡順太郎殿

貴下

第二商業學校彙報

矢野督學官の來校

昨年十一月四日、文部省矢野督學官來校、校
内を視察せられた。

級擔任職員會議開催

同月十一日午後四時二十分より、級擔任職員會議
を開催し、生徒處分の件につき議するところあり
五時閉會。

第二學期授業終了及試験施行

去月十日を以て大正十四年度第二學期授業を
終了し、十四日より十八日まで同學期試験を
施行した。

第二學期操行調査會

同月十八日午後一時から第二學期操行調査會
を開催、各級擔任教諭出席、四時閉會す。

第二學期終了式舉行

同月二十四日午後五時から第二學期授業終了
式を舉行した。定刻各教職員列席、木下主事
の訓示があつて六時閉式す。

柿崎記念
文庫基金 寄附申込者芳名

(一口金額五圓)

- | | | |
|---|---|---------|
| 一 | 口 | 寺島小五郎氏 |
| 三 | 口 | 植村俊平氏 |
| 七 | 口 | 白莊司芳之助氏 |
| 五 | 口 | 喜多村桂一郎氏 |
| 二 | 口 | 棚橋一郎氏 |
| 二 | 口 | 西山廣榮氏 |
| 二 | 口 | 戸田孝作氏 |
| 二 | 口 | 富田金三郎氏 |
| 四 | 口 | 橋本重幸氏 |
| 五 | 口 | 宮岡恒次郎氏 |
| 一 | 口 | 片口安之助氏 |
| 一 | 口 | 水谷揆一氏 |
| 五 | 口 | 白川朋吉氏 |

- | | | |
|---|---|--------|
| 五 | 口 | 山口房五郎氏 |
| 五 | 口 | 宮島綱男氏 |
| 一 | 口 | 村上喜貞氏 |
| 一 | 口 | 山口造酒氏 |
| 三 | 口 | 川地喜三郎氏 |
| 六 | 口 | 林龍太郎氏 |
| 一 | 口 | 川勝武夫氏 |
| 二 | 口 | 水上長次郎氏 |
| 四 | 口 | 黒田莊次郎氏 |

(第二頁より續く)

渡期である。
土地整理以前、村が土地を共同所持してゐた
頃には地割制度が行はれてゐた。徳川時代、
それ以後に於ても、他府縣にも存した制度で
はあるが、その發生の原因は、異つてゐる。
私は信じてゐる。地割制度は露西亞、瓜哇、
印度にも行はれたが、その發生の理由には、
又自ら異なるところがある。レビンスキーの如
く土地の共同所有を、私有制度に後るもの
とする解釋も、露西亞のものを以て強いて一
般に類推しやうとする弊はないであらうか。
琉球の地割制度は、文獻に徴せば享保年間ま
では溯り得る、慶長年間島津氏の侵入後、精
査編成した、竿入帳の殘編、宮古島に關する
書類は、各個人別に土地の所持が記されてゐ
る。しかし其後の地割制度の行はれた時代の
名客帳も土地の所持は、各個人別に記されて
ゐる故に、これを以て慶長以後の發生である
と斷定することも出来ない。
地割制度については、尙多くの問題があるが、
それは何れ他の機会をまちたい。瞥見記の役
目は、この雜文で筆を擱くべきであらう。

校友の面影

辯護士 藪下吟次郎氏

明治三十九年法律學科出身

『此間から數回吾が主になつて公開の模擬
裁判をやつたが其結果に就いて多少感じたこ
とがある。御承知の通り我國でも多年の懸案
であつた陪審法が愈來る大正十七年から實施
されることになつてゐる。勿論之は豫定のこ
とだから夫迄に
こんな變更が起
るかも知れない
が假りに之が豫
定通り實施され
るとして果して
夫が今日期待さ
れてゐるやうな
効果を擧げ得る
であらうか、具
體的に云ふなら
ば今日の狀態で
社會一般が推移して行くとして其實施の年ま
でに此制度を完全に運用し得るだけの用意が、
一般社會の方面に於いて出来るであらうか否
か、最近の經驗を通して得た僕の考へは甚だ
保守的な様だが否定の方に傾いてゐる。
即ち例の模擬裁判の結果に見るこゝ——勿論此
裁判は陪審制度に依つて行つたものであるが
——或ひは市會議員とか新聞記者とか所謂知
識階級として又相當社會的地位を有するもの
と一般に目されてゐる人々が陪審員としての
機能を充分に發揮し得ないやうに思はれる。』



藪下吟次郎氏

尤も之等の人人は専門家でないのでから陪審
法そのものについて完全な理解がないのは當
然にしても、其最も重大な職能である事實の
制定に關し尚ほ必要な知識に缺けてゐるやう
である。吾等のやつた例は或る女が嫉妬から
男のある家を焼いて之を殺害したと云ふ事件
であつて最初のブランクでは放火の事實を認め
て殺害の事實を認めない、従つて放火につい
てのみ有罪の判決を下す筈であつた。従つて
殺害の事實を否定する材料、例へば被害者の
死ぬ時に被告が
現場に居合せな
かつたとか、傷
害の箇所が申立
と異なるとかが列
挙してあつたに
も拘らず、陪審
員は此材料を活
用し合理的に判
定を下すことを
なし得なかつた
中には何にも意
見はありませんと濟し込んでゐる陪審員さへ
あつたやうで、こんな有様では折角陪審制度
が實施されても恐らく其實を擧げることが出
來ず徒らに人が人を裁くことの危険を曝露す
るに止まるであらう。
故に今後各裁判所、警察署を始め學校、青年
團等に於いて機會あるごとに陪審法の精神、
實地の應用を社會に示し、人人をしてこの制
度を活用し、事實の判定に對して正確なる判
斷力を養はしむることが目下の急務であるこ
思ふのである。』

話者は之眞摯なる生活態度、毫も邊幅を飾らず、率直にして磊落、拘すべき人格の所有者として名高い、辯護士數下吟次郎氏である。氏は寒霞溪で名高い香川縣小豆島の産、大正五年判檢事、辯護士の兩試験を一時にパスして京都裁判所に試験となり、本官に任じてからは、松山、廣島、宇和島の各地方裁判所に歴任し、大正十年思ふころあつて官を辭し、大阪に法律事務所を開いて今日に及んでゐる。性來の天真爛漫さが災ひして時に人に誤られることはあるが氏を知る人にして氏を敬愛せざるを得ざるの



小林儀三郎氏

實業界に身を投じた。即ち名古屋電力株式會社に入社したのを初めとして京都電氣株式會社、讃岐電氣軌道株式會社に各社員として勤め大正三年三月現在の勤務先である不動貯金銀行に入つた。最初の滿二十二年間は本店檢査係として全國に散在せる七十餘の支店を巡歴し之を檢査するの任に従つたが大正五年四月一躍して同行丸龜支店支配人に拔擢せられ同年九月同行久留米支店支配人に轉じ更に同年八月には長崎支店支配人に本年八月には岡山支店支配人に轉じ以て今日に至る。

而して其間氏は常に快濶圓滿なる態度を以て積極的に活動する小儀終始した。即ち三氏の胸に秘められる縱横の奇策烈烈たる覇氣は常に此快濶圓滿なる態度を通し

は現世の贅を盡した金殿玉樓に勝る萬萬である。而も『なかに之からでさあ』と力むあたり此人尚ほ爲す有るを思はす頻なるものがある。吾人も亦筆を投じて氏の將來に刮目せんかな。

不動貯金銀支配人 小林儀三郎氏

行岡山支店 明治四十四年法律學科出身

氏は明治二十一年香川縣觀音寺町に生る。幼にして大阪に笈を負ひ本學を卒業するや同窓の多くが法曹界に志す中に思ふころあつて

失ひ或ひは和けられて、却つて能く本領を發揮したのである。而も氏は業務の向上發展を以て寧ろ唯一の樂となし匆忙たる事務の堆積裡に在つて自らの生命を見出し來つた。故に寸暇を盗んでは業務に關する研究を怠らず、研究の結果は又之を實地に應用することを忘れず兩兩相俟つて氏が今日の地位を築くに役立つと共に更に將來に對する發展の礎石となつてゐるのである。唯少しく園藝を嗜み讀書三昧に耽る以外には所謂道樂もなく夫人との

間に二男一女を設けて平和と幸福に満ちた家庭を作つてゐる。長男の正さんは明けて十四歳、目下第一岡山中學校の一年生で父君と前途の明るさを競ふてゐる。やう、氏の將來に一層の希望を副ふるものであらう。最後に氏は謙讓な態度で最近の感想を物語る。

『十數年間實業界に在つて各地に轉轉し殊に現在の仕事については人知れぬ苦勞もします。近頃では多少一般經濟界の事情もわかるやうになりました。今にして思ふことは如何なる事業に従事するも眞面目に之に當り熱誠と努力をさへ缺かなければやがて其仕事に通曉し得て樞要な地位にも就き得る云ふことでもあります。私の従事してゐる貯蓄銀行の仕事は一面營利事業であると同時に他面社會に必要な國家的事業でもあります。幸ひ一段の修養と奮勵を以て多少國家社會に裨益するところあらしめ母校に負ふてゐる御恩の萬一にも報ひ度い存じます。而して氏の所期が達せられることは又同時に氏自身の成功と榮達とであらねばならぬ。吾人は此意味に於いて氏が今後一層の自重を望んで止まぬものである。』

校友諸氏ニ告グ

例年ノ通り大正十四年度本會會員名簿既ニ出來致シ居リ候間御入用ノ方ハ實費金三十五錢相添へ本會宛テ御申込被下度候
大正十五年一月

大阪市此花區福島
關西大學校友會

校友彙報

福岡支部秋季例會

昨秋十一月十四日午後五時から小倉市勝山閣に於いて本學校友會福岡支部秋季例會が開かれた。縣下在住の校友遠近より來り會し定刻支部長池田重吉氏の挨拶を以て開會、宴に移るや勝山城下の明媚なる風光一眸の下に展開し、在學時代の懷舊談に興愈深く午後十時過一同歡を盡して散會した。(池田重吉氏報)

大阪支部秋季大會

本學校友會大阪支部秋季大會は例年の通り去る十一月十五日の日曜日を以て箕面寶塚方面に催された。午前十一時會員一同阪神急行電車梅田停留所に集合、同線寶塚線に依り箕面に向つて出發、正午一先づ箕面公園内歡喜天境内に集合して晝食を喫し、各自恰も紅葉真盛りの同公園内を散策し、宴會場に宛てられた寶塚溫泉前寶山閣に向つた。

清流に臨める大廣間に會する者左記約百名、午後四時開會、先づ砂川支部長の挨拶を兼ねたる會務の報告があり、次で役員改選に就ては、滿場一致支部長は砂川氏の留任に決し、副支部長は前任白川朋吉氏が大阪市會議長として多忙の故に辭任、内藤正剛氏が代つてこれに推され、幹事には左の諸氏が選ばれた。西本政五郎、本田武藏、棚木浩巖、和田相也、丹二良、辻村政治、中務平吉、中村敏雄、野口政次郎、増山忠次、近藤友房、湯原慶太郎、宮島綱男、三野莞爾、須々木庄平(イロハ順)

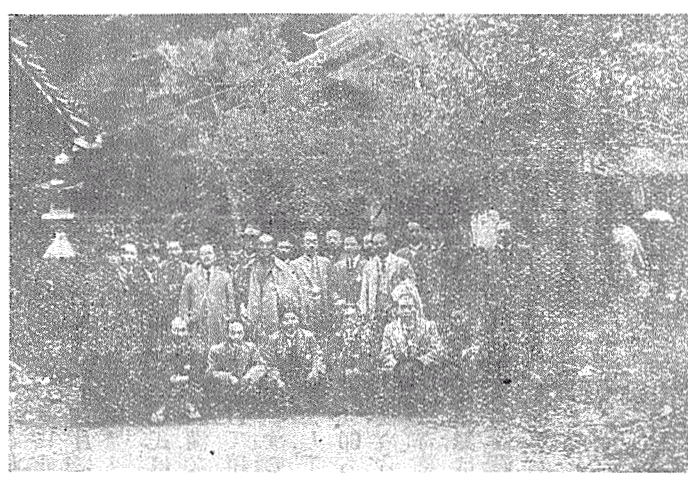
かくて宴に入り、寶塚藝妓の手踊等の餘興があり、午後七時半盛會裡に閉會散解した。

出席者（順序不同）
板垣不二男、岩本政市、稻葉正雄、岩崎卯一、岩尾康、飯田清藏、糸島實太郎、岩岸巖、橋本鹿藏、濱田昌尾、花井壽造、林經夫、西本政五郎、本田民藏、富田貞男、棚本浩藏、戸田省三、大崎萬太郎、岡本重治、安西大次郎、岡本義男、和田相也、渡邊菊之助、川崎齊一郎、川浪辰次郎、神田榮吉、金井正夫、吉崎龜之助、吉野謙吉、吉村種藏、吉田音松、武田貞之助、垂水善太郎、武森武市、高村久之助、高松林之助、瀧本貢、田川七郎、辰巳經世、谷田俊二郎、丹二瓦、辻村政治、中村鄭次郎、中村秀光、内藤正剛、中川與之助、中江清、中井彌六、中塚正信、中村良之助、室石常秀、村松岩吉、村尾靜明、野島藤次郎、野村吉藏、野口政次郎、黒田莊次郎、山口房五郎、鮫下吟次郎、山内善二、安岡伸裕、山根龍藏、山本彌一郎、増山忠次、丸山普生、松崎義盛、松本標四郎、古川源太郎、深川澄夫、小泉幸治、後藤田德太郎、近藤友房、江草次郎、櫻井匡、佐藤増吉、菊地金次郎、木戸卯之助、清成五六郎、木下孫一、宮島綱男、三野莞爾、道端常治郎、三島律夫、宮本政藏、島田菊次郎、篠田翠夫、白川朋吉、清水新造、廣瀬德藏、森川太郎、關豊馬、砂川雄俊

東京支部秋季總會

昨年十一月二十日午後五時から、東京日比谷公園松本樓に於て、本學校友會東京支部秋季總會が開催せられた。定刻左記諸氏出席、松本學長から母校の近狀に就き、又大藏省政務次官武内作平氏から財政問題に關する講演があり、その他各自の三分間演説あり、午後十時興を盡して散會した。

西淀川俱樂部總會



西淀川俱樂部總會
眞面目に於ける校友會大阪支部會員の一部

三九會例會

明治三十九年度卒業生よりなる本學校友會三九會は舊臘十二月四日夕刻より堂島朝日に於いて秋季例會を催ふした。出席者左の通りで何分多士濟濟の同會のこゝにて牛鍋を取り巻きつつ氣焰の舉がるこゝ頗るで午後十時過歡談裡に散會した。

岩本政市、石塚大藏、馬場太熊、遠部逸太郎、高村久之助、堤新吉、中村虎次郎、植村久太郎、野村吉藏、鮫下吟次郎、松本靜史、眞珠清彦、古田吉五郎、兒玉善吉、水野義恕、平尾貞、平岡啓道、森内梅吉の諸氏（イロハ順）

因に同會次回の幹事は左の通り決定した。高村久之助氏、馬場太熊氏、石塚大藏氏、岩本政市氏、別役金之助氏、平尾貞氏、野村吉藏氏

西村校友來信

かねて米國コロムビア大學に於いて會計學研究中の校友西村勝太郎氏は最近本學宮島教授宛一書を寄せた。左に其一部を掲載する。

（前略）目下當大學在籍同胞約百十餘名を算し候も母校の卒業生少く残念に存居候處今回同窓中川庸太郎氏渡米せられ些か心強く感じ奉り候、殊に同じ School of Business に机を並べ居候、こゝは喜び一層のこゝに御座候、次に小生過去一ヶ年専ら語學の勉學に意を注ぎ居候ひしが今般より Prof. Keiser に付き會計學を初歩より研究致し居り其他必須科目も少からず負擔に弱り居り候、去

春以來多少健康を害し居候爲め學報局に對しても久しく御無沙汰仕り申譯無之候へども夏以來大いに健康の恢復に勉め居候へば其中何等か御報告申上得る。こゝに存居候（下略）……

大正十三年度

經濟科卒業生諸君に

吾吾同じ學窓に學んだ者が業を卒へたる今日段階昔の友情が薄いで行き氏名さへも忘れやうとしてゐるこゝは誠に遺憾の極みであります。故に十三年度經濟同窓會を作つて舊交を温むるこゝ同時に將來も相共に向上の道を辿り度いと思ひます。切に有志諸氏の御賛成を待つ。

大阪市南區上本町三丁目二八
大正十三年度專門
部經濟科卒業生 新田 武吉

校友動靜

永田良雄氏（明三五法）南區大寶寺町中三丁目二五に法律事務所を移轉し又新に和歌山事務所を和歌山市五番丁一に設けた。
船越盛人氏（大一一經）昨年四月頃から兵庫縣三原郡淡路民報社に入社し目下同社湊支局長の地位にある由。
佐藤芳太郎氏（大一一商）從來經營して居たミカサ藥局を他に譲渡し西區川口町川口ビルディング内に藥品商店を開いた。
鞍貫 宜氏（大六法）港區八幡屋松之町二丁目二〇三に會計士事務所を開いた。
諏訪賢三郎氏（大一一經）從來大日本人造肥料株式會社大阪工場に在勤してゐたが今回

岡山縣兒島郡小串村にある同社岡山工場に
轉任し同社宅に居を定めた。

澤田多門氏(大一二商) 今回フィリピン。
ダバオ市太田工業會社に入社した。

奥田正雄氏(大一二商) 今回神戸市布引町
二丁目一番屋敷に會計士事務所を開き一般
の依頼に應ずることになった。

堀 四郎氏(大一二商) 昨秋十月二十六日
市内相愛高等女學校出身の秦綾子嬢と華燭
の典を挙げた。

小林茂一氏(大一二商) 舊臘一年志願兵と
して篠山歩兵第七聯隊に入營した。

松永賤松氏(明三七法) 從來勤務中の名古屋
屋廻信局を退き愛知縣一宮市一宮郵便局長
となつた。

下井信三氏(大四法) 福岡縣戸畑警察署
長を拜命した。

向井和三氏(大一二商) 昨冬和歌山市歩兵
第六十一聯隊第九中隊第一班に入營。

上田貞藏氏(明三七法) 臺南地方法院部長
となる。

新居 寛氏(大三法) 日清火災保險會社
を退社し住吉區天王寺町二九二に居を定
めた。

校友住所移動

阿久津淺之助氏(四法) 千葉縣松戸町裁判所前
田原 孝(明三六法) 安東縣三番通七丁目田原
醬油店內

吉田鹿之助氏(一三法) 京都府天田郡福知山町堀
一三八二地

上田貞藏氏(明三七法) 臺南市開山町法院官舎
近藤 博明(四五法) 此花區下福島一丁目

高田密藏氏(一二法) 住吉區天王寺町一八九五
辰巳方

平川 德雄氏(一二法) 港區南恩加島町一―二大
阪築業セメント社宅内

大津 一夫氏(一〇經) 岡山縣小田郡笠岡町宇大
磯

村山春喜氏(一法) 和歌山縣御坊町島二二七
萩野義正氏(三法) 港區泉尾上通二丁目一
(勤務先 東洋紡績株式會
社三軒家工場)

富家逸郎氏(九法) 東京市外野方町下澤袋一
五九二

長久保 昇氏(一商) 中河内郡小阪町中小阪五
三六

下村吉丸氏(一三法) 神戸市下三條町三三七
有住 眞氏(一二經) 北區中之島二丁目二華田
商會

杉山志敏氏(四專經) 東成區林寺町一七三
廣澤圭二氏(明三一法) 東京市牛込區市ヶ谷臺町
一四番地

福田 慶氏(四法) 東京府荏原郡駒澤町宇深
澤六二三

芦田茂里男氏(一三商) 神戸市駒ヶ林町二丁目七
〇生魚氏方

秋山卓爾氏(一〇商) 阪急沿線豊中村二四七

校友改姓名

(舊) 藤井 一 (新) 大津 一
大〇經

校友逝去

大正十四年十月

大阪府中河内郡玉川村大字菱江
藤戸 貞治 郎氏
(明治四十二年專門部法律學卒業)

右訃音に接し謹んで弔意を表す

千里山俳壇 朝冷選

校友 濱名 青嵐

雁わたし木の葉が舞へる水の上
色鳥や銃の銜の山木立

法文 津田 道之助

岐れ路や曼珠沙華咲く光悦寺
秋の雨初日の芝居誘はるる

法燈に十夜の人輪動きけり
通草揺るる木に日のあたる立話

案内僧聲高らかに萩の寺
つくばいに木の實降りつぐ茶寮哉

追 加 朝 冷

冬めきし町の夕の猿芝居
追 加 朝 冷

鬼追ふ艸山霞残りけり
ちりちりの日に風添ひし刈田哉

二三軒の家に日あたる刈田哉
遠足を樂しみ寝ねず置炬燵

□當季雜詠募集

茶の花の一輪に雨の爐を點す
□句數制限なし、用紙半紙、封皮には必ず「千
里山俳句」を朱記のこと

送稿先 兵庫縣灘深江 有田 朝 冷宛

千里山歌壇 編輯部選

△ (前講師) 早川 祐吉氏

いささかのいさをぬすみ横文字の講義をば
聴くあはれ老書生

悶えをばやらんこの術西の國の書よむわれを
あはれと思ほせ

△ せうぞふ
ふつくりと頼杖の掌にもたれたるひけそり後
の肥りうれしも

△ 我が頬に己が誇りを求めつつ夕餉の膳に妻我
を見る

△ 寶塚にて 大木 原健司
久方にしみじみ雲をながめけり少女歌劇の
ペランダにゐて

△ 驟音の中のしじまよ大空の雲にさけ行く我が
心かな

△ 少しづつ形くづして薄れ行く一ひらの雲に秋
深みけり

△ 昨日今日つくつく休みを家に居て忘れし若さよ
みがへりけり

△ 久に見る芝居に涙流しつつ我が思出をいとし
めるかな

△ もののあはれ忘れて過すなりはいに尙ほ涸
れ兼ねし涙ありしが

△ なりはいの力にあまり此の日頃何こは知らね
胸の痛さよ

△ ひこひらの名にくがれつつかくて我は魂をも
身をもすり行くらんか

千里山學報維持費受領報告

(到着順)

金參圓也	大一經	江頭勝美氏	金貳圓也	明三七法	中村淺之助氏
金貳圓也	明四四商	富田金三郎氏	金貳圓也	明四三法	竹井小野右衛門氏
金貳圓也	明二四法	武田貞之助氏	金貳圓也	明三〇法	小倉米吉氏
金貳圓也	明三九法	鮎子多正雄氏	金貳圓也	明三四法	谷岡寬氏
金貳圓也	明三九法	天羽強氏	金貳圓也	明三六法	平田金次氏
金貳圓也	明三九法	堤文氏	金貳圓也	明三六法	石川七之助氏
金貳圓也	明二九法	勝井喜藏氏	金貳圓也	明三六法	前田榮一氏
金貳圓也	明三五法	吉田音松氏	金貳圓也	明三六法	西山儀助氏
金貳圓也	明三七法	樋口正剛氏	金貳圓也	明三六法	松永賤松氏
金貳圓也	明三六法	森下龜太郎氏	金貳圓也	明三六法	深川澄夫氏
金貳圓也	明二九法	大原敬藏氏	金貳圓也	明三六法	水田信重氏
金貳圓也	明三六法	宮崎秀夫氏	金貳圓也	明三六法	白莊司芳之助氏
金貳圓也	明三六法	萩原敏隆氏	金貳圓也	明三六法	高島巧氏
金貳圓也	明三六法	森英之助氏	金貳圓也	明三六法	三木盛男氏
金貳圓也	明三六法	杉浦敏雄氏	金貳圓也	明三六法	香川知足氏
金貳圓也	明三六法	鈴木良助氏	金貳圓也	明三六法	宮本政藏氏
金貳圓也	明三六法	岡定久氏	金貳圓也	明三六法	中村慈氏
金貳圓也	明三六法	瀧川堯氏	金貳圓也	明三六法	小林太三郎氏
金貳圓也	明三六法	梅田茂枝氏	金貳圓也	明三六法	吉村種藏氏
金貳圓也	明三六法	松井長次郎氏	金貳圓也	明三六法	栗尾高三氏
金貳圓也	明三六法	深川重義氏	金貳圓也	明三六法	西海眞治氏
金貳圓也	明三六法	村松岩吉氏	金貳圓也	明三六法	津川彌三郎氏
金貳圓也	明三六法	中川與三郎氏	金貳圓也	明三六法	信田芳氏
金貳圓也	明三六法	和田義爲氏	金貳圓也	明三六法	東田憲二氏
金貳圓也	明三六法	新町德之氏	金貳圓也	明三六法	眞田俊雄氏
金貳圓也	明三六法	竹谷善隆氏	金貳圓也	明三六法	中村儀藏氏
金貳圓也	明三六法	板谷幸氏	金貳圓也	明三六法	島田伊織氏
金貳圓也	明三六法	岡島峯藏氏	金貳圓也	明三六法	藤戸貞次郎氏

金貳圓也	明三六法	小笠原語咲氏	金貳圓也	明三六法	小林和一氏
金貳圓也	明三六法	堂本源吉氏	金貳圓也	明三六法	北本常三郎氏
金貳圓也	明三六法	平岡啓道氏	金貳圓也	明三六法	上河力藏氏
金貳圓也	明三六法	栗原毅氏	金貳圓也	明三六法	岡田善男氏
金貳圓也	明三六法	井上賢一氏	金貳圓也	明三六法	射場正謙氏
金貳圓也	明三六法	藤戸貞次郎氏	金貳圓也	明三六法	山室要氏
金貳圓也	明三六法	島田伊織氏	金貳圓也	明三六法	半田正三氏
金貳圓也	明三六法	中村儀藏氏	金貳圓也	明三六法	野崎勇次郎氏
金貳圓也	明三六法	眞田俊雄氏	金貳圓也	明三六法	山口作之進氏
金貳圓也	明三六法	東田憲二氏	金貳圓也	明三六法	梶浦太郎氏
金貳圓也	明三六法	信田芳氏	金貳圓也	明三六法	田村春喬氏
金貳圓也	明三六法	津川彌三郎氏	金貳圓也	明三六法	瀬戸福三郎氏
金貳圓也	明三六法	西海眞治氏	金貳圓也	明三六法	大道寺慶男氏
金貳圓也	明三六法	栗尾高三氏	金貳圓也	明三六法	上田一郎氏
金貳圓也	明三六法	吉村種藏氏	金貳圓也	明三六法	田原孝氏
金貳圓也	明三六法	小林太三郎氏	金貳圓也	明三六法	片岡益雄氏
金貳圓也	明三六法	中村慈氏	金貳圓也	明三六法	八田原彌一氏
金貳圓也	明三六法	宮本政藏氏	金貳圓也	明三六法	武森武市氏
金貳圓也	明三六法	香川知足氏	金貳圓也	明三六法	川勝武夫氏
金貳圓也	明三六法	三木盛男氏	金貳圓也	明三六法	村尾靜明氏
金貳圓也	明三六法	高島巧氏	金貳圓也	明三六法	眞珠清彦氏
金貳圓也	明三六法	白莊司芳之助氏	金貳圓也	明三六法	渡邊良三郎氏

關西甲種商業學校彙報

行事

第二學期終了 昨年十二月十四日より十九日まで第二學期試験を施行し、二十五日より冬期休業に入る。
郵便事務實習 本校第四、五學年生は例年の如く、大阪逓信局の依頼により、年末年始の

郵便物輻輳期を事務實習のため、市内各郵便局に配置せらるることになった。
學友會誌發行 學友會誌第十二號を十二月初旬に發行し、卒業生その他に配付した。

野球部優勝

關西體育協會大阪支部主催、池田師範、中外商業及び關西甲種商業の三校野球リーグ戦は去る十一月十五日大阪電鐵沙の宮球場で舉行當校は大阪中等校の強剛二校を美事打破り左のスコアにて優勝の榮冠を獲得す。

關甲商14 池師13 (第一回戰)

盤川磨山村綱邊所下 2 盜 6 失策 10
常森播陰中荒渡別木 打數 47 安打 13 三振 2 四球 5

池 三左投遊捕中一二右 打數 47 安打 13 三振 2 四球 5

關 田川川取野松田田上 5 盜 4 失策 10
前中西香三森石久井 打數 43 安打 11 三振 6 四球 4

關 遊中一捕投右左三二 打數 43 安打 11 三振 6 四球 4

關 本壘打三野、二壘打香取、石田、三壘打荒網
關甲商4A 中外3 (第二回戰)

川野崎村西野原塚口水 6 盜 3 安打 10
石淺川川香松木中阪清 打數 33 失策 5 三振 5 四球 6

中 二遊 打數 33 失策 5 三振 5 四球 6

甲 田川川取野松田田上 2 盜 6 失策 6
前中西香三森石久井 打數 37 安打 6 三振 3 四球 2

關 遊中一捕投右左三二 打數 37 安打 6 三振 3 四球 2

三壘打香取、二壘打西川 得點 關 100000102A=4A

學生彙報

學部三年卒業記念旅行

學部三年の有志は昨年十一月三四の兩日に互り學生生活の最後を印象づけるため琵琶湖遊覽を目的として卒業記念旅行を試みた。

豫定通り第一日は楓葉一枝また萬枝江橋を掩映する地を心ゆくまで鑑賞して大津市中村屋旅館に投宿、法政商合併のクラス會を開催、各自獨特の隱藝發表の珍奇化に酔はされ午後九時十五分に閉會した。

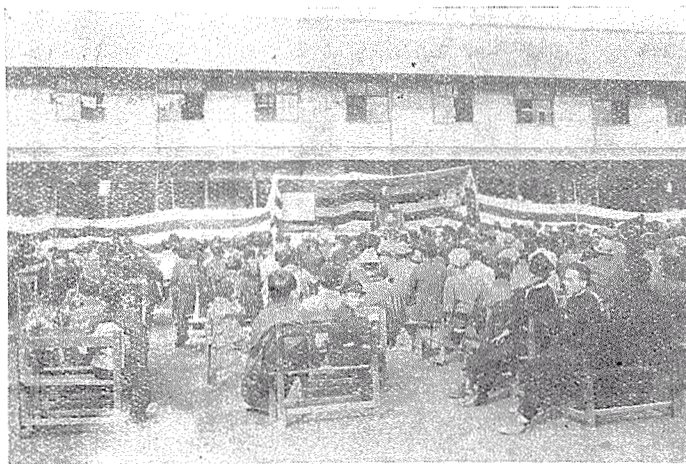
第二日は太湖汽船會社の八景丸を借切り午前九時より琵琶湖周遊の途に就き離陸に際して記念撮影を済した。秋晴の空に一點の雲もなく水も澄み眼の及ぶ限り皆一色の湖面は鏡よりも明であつた。中食頃竹生島へ寄つて菊の薫り紅葉の色に俗腹を洗つたが湖上波高く怒濤は船を木葉の如く弄び爲めに長命寺其他の寄港を止め歸路を急いだ。船中で再び花の渚に舟漕ぎ寄せ柳の岸に酒を沽ふの情緒を續けて遂に歸津したのは六時四十分であつた。蒼蒼として黃昏れゆく彼方の皎皎たる明月の光をあびつつ千里山關西大學萬歲學部三年萬歲の聲は聽て來るべき社會に活躍する若人の意氣を高く傳へるが如くであつた。

(M、M、君報)

全國學生雄辯大會

千里山、福島兩文藝部主催の全國各大學專門學校學生雄辯大會は恒例の通り昨冬十一月十五日(日曜)中之島中央公會堂に於いて晝夜二

回に互り花花しく開催された。参加校全國に互つて約四十校を數へ折柄の小春日和に會場は立錫の餘地もなきまでに聴衆を以て埋り、近來稀に見るの盛會であつた。閉會後本學委員は他校の辯士を招待して慰勞の小宴を張り



福島學友會辯論部主催雄辯會(壇上は宮島教授、前號記事参照)

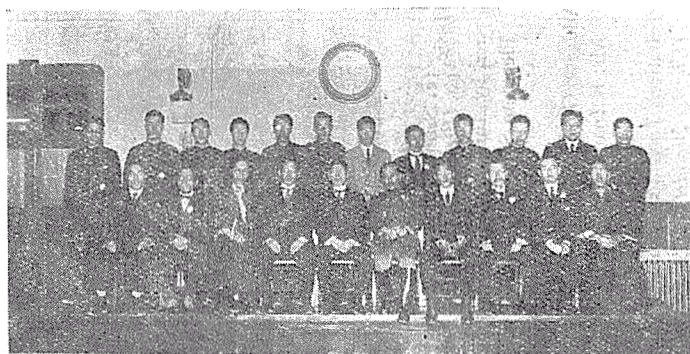
一同歡を盡して散會した。因みに當日のプログラムは次の通りで、同部では種種後援の勞を採られた大阪時事新報社に對し厚く感謝してゐる。

プログラム

(畫之部)

- 一、開會之辭 幹事 藪下益治君
- 一、 本學 山本耕三君
- 一、第三の接吻 西山專門 松岡隆璋君

- 一、藥學と民衆 京都藥專 水内精一君
- 一、 三 高 飯塚富太郎君
- 一、農村行詰の打開策 三重高農 小川征二君
- 一、眞の宗教は合理的人間を指導し得るか 京都佛專 國友高留君
- 一、東洋の一隅に叫ぶ者 大阪高工 山口次郎君
- 一、 和歌山商 伊藤武夫君
- 一、 愛知醫大 安間盈虎君
- 一、人間を凝視して社會政策の根本思想に及ぶ 八 高 富田一郎君



彰顯會記會大學語能主會語英

- 一、湧き出づるもの 立命館大 黒野觀隆君
- 一、現代を俯瞰して 立正大學 阪本財一郎君
- 一、司會者挨拶 幹事 木村鹿男君
- 一、財界の苦と其打開策 横濱高工 西井守藏君

- 一、心の叫び 大阪外語 木村貞夫君
- 一、社會變革過程に於ける指導意識 京都帝大 吉川猛夫君
- 一、 名古屋商 樋口石松君
- 一、政黨界の無自覺 明大豫科 遠藤 求君
- 一、 本學 石田三郎君
- 一、東に立ちて 國學院大 島田春雄君
- 一、 宗教大學 齋藤宜啓君
- 一、若干時論を考察して人格主義を提唱す 神戸高商 岩田 巖君
- 一、日本の革命運動と無産學徒の社會的役割 法政大學 武藤一郎君
- 一、 專修大學 根本荒村君
- 一、 本學 原田 滿君
- 一、閉會 辭 幹事 三宅萬吉君

(夜之部)

- 一、開會の辭 幹事長 香西政一君
- 一、 本學 藤井迪夫君
- 一、土に還るべきか 甲南高等 今井榮 郎君
- 一、 眞宗專門 伊藤彌太郎君
- 一、果して然り? 立命館大 青木雅英君
- 一、人生への學術相對的觀察 大阪藥專 田中英次君
- 一、 島取高農 林原 英君
- 一、 濱松高工 齋藤仙松君
- 一、吾等は何を爲すべき 臨濟宗大 稻葉明堂君
- 一、 大阪醫大 牧野利三郎君
- 一、考への脱線 高知高等 玉林憲義君
- 一、 本學 森田正芳君
- 一、特殊文化より普通文化への轉回 日本大學 中野 清君
- 一、戦國より解放へ 農業大學 北 眞藏君
- 一、機械發達の一觀察 神戸高工 富田眞雄君
- 一、 京都高農 堀田禎吉君
- 一、司會者挨拶 文藝部長 松井慶次郎君

- 一、關稅會議について 同志社大 谷 信二君
- 一、米化を思む 山口高商 深山光次郎君
- 一、 高野山大 中條眞善君
- 一、 本 學 榎本信夫君
- 一、 對支政策の真髓 東協大學 新井英一君
- 一、 社會運動の基調たるべき宗教 龍谷大學 深瀬義郎君
- 一、 世相善惡論 大阪高商 福田 肇君
- 一、 政治既成概念の脱却と民衆政治の理想 關西學院 稻岡 進君
- 一、 社會正義の確立と階級闘争 中央大學 椎熊三郎君
- 一、 本 學 野坂眞三君
- 一、 閉會之辭 幹 事 服部繁太郎君

英語會主催語學大會

本學年中行事の一たる語學大會は十一月二十二日(日)午後六時三十分から大阪毎日新聞社大講堂に於て催された。専門部第三學年武田君の司會の下に定刻

本學音樂部員の學歌合唱を以て始まり飯田講師は開會の辭を述べ引續き學生諸君の英、獨、佛、エスベラント語の演說暗誦があつた。小泉教授は學校を代表して諧謔混りに挨拶を述べ又佐々教授は約三十分間に亘つて Life and Law なる題に其の流暢なる英語を以て内容ある講演を爲し經濟學部第二學年の四辻君の閉會の辭を以て午後十時盛會裡に會を終つた。此機會に於

て、多大の後援を與へられたる大阪毎日新聞社に對し感謝の意を表する。尚、當日のプログラムは左の通りであつた。

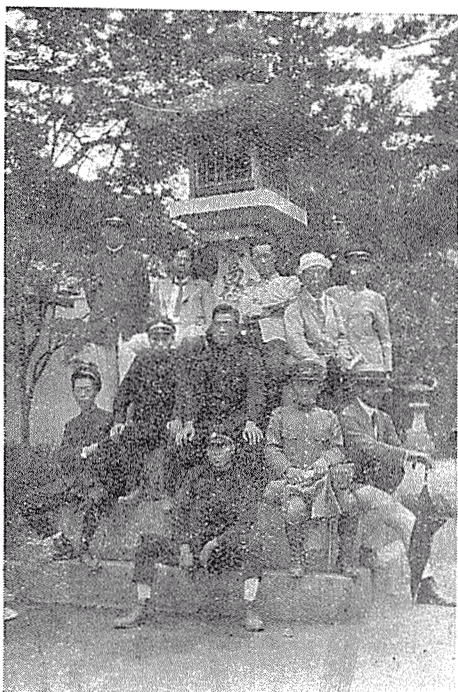
PROGRAMME

Chairman.. Mr. K. Takeda

(専門部第三學年 武田熊太郎)

PART I

- 1. Kansai University Song.. Kansai University Plectrum Society (關西大學音樂部)
- 2. Opening Address.. Prof S. Iida (關西大學講師 飯田清藏)
- 3. Address, Social Justice.. Mr. K. Seto (専門部第二學年 瀬戸健助)
- 4. Hersagen, Der behogene Teufel Herr. H. Miyata (法學部第一學年 宮田平三)
- 5. Music, Marcia Len'io (Murken, op. 15) art. by H. K. Abe.. Kansai University Plectrum Society (關西大學音樂部)



念記會敬崇陵皇回七第 (てに内境橋八田學)

- 6. Address, Unemployment.. Mr. Y Nakagawa (専門部第一學年 中川吉雄)
- 7. Address, Socio de lago (Esperanto) Mr. M. Eniguchi

- 8. Salutation.. Prof. K. Koizumi (法學部第一學年 江里口正行)
- (關西大學教授 小泉幸治)



念記會敬崇陵皇回八第 (てに谷分父祖)

- 9. Closing Remarks.. Mr. A. Yotsuji (商學部第二學年 中野勇次郎)
- (經濟學部第二學年 四辻 諒)

PART II

- 1. Music, {a. Serénite del Gondolier.. Savino} {b. Ullimishino (Gallop).. Marengo} art. by Antonitti.. Kansai University Plectrum Society (關西大學音樂部)
- 2. Address, Gazing at something Mr. K. Inamura (大學豫科第二學年 稲村金藏)
- 3. Récitation, Tableaux Parisiens (Charles Beaudelaire).. M. K. Ayabe (大學豫科第三學年 綾邊研三)
- 4. Music, Gli Orosii I Chazii (Sinfonia) G. Poli.. Kansai University Plectrum Society (關西大學音樂部)
- 5. Address.. Prof. Y. Sasa (關西大學教授 佐々 穂)
- 6. Address, Romaji.. Mr. T. Yamaguchi (大學豫科第三學年 山口長雄)
- 7. Music, Fantásit sul "Bocaccio" (de Franz von Buppé).. di V. Billi Kansai University Plectrum Society (關西大學音樂部)
- 8. Address, Labour and Maintenance Mr. Y. Nakano

ニ式蹴球部一勝一敗

阪神専門學校ラグビー聯盟戦に参加した本學は昨年十一月十四日午後二時から大阪高等學校と同校校庭に於いて相見え、下村氏レフエリーの下に大阪高等學校のキックオフで開始大接戦を演じたが十一對九で本學惜しくも敗れた。當日兩軍のメンバー次の如し。

大 高

木井谷松 本田 原田 山田村 原中
鈴増岡富 梅植富山 村和 三田 檀 榎竹
F.W. { T.B. { F.B.
田村 藤島 張 井田 地野 田星 本川
池山 佐中戸 藤小井 脇原 二稻瀬 林

關 大

越えて十二月二日同聯盟戦に於いて關西學院に對し、午後三時半から大市氏レフエリーの下の淀川鐘紡グラウンドに本學の先蹴で開始

本學最初より敵を壓して點をなさしめず結局十三對零で本學の大勝に歸した。メンバー次の通りであつた。

關大

藤田 田井 村田 島星 地野 田 本宅 谷
佐武 益藤 山小 中二 北脇 原 稻三三
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
原添邊 西野 田田 澤宅 原邊 田川 垣中
松岡 渡川 藤寺 立村 三榎 渡中 前正 田

關學

註(1)から8まではホワード9 10 ハーフバック
11から14まではスリークオターバック15フル
バック)

ア式蹴球部遠征成績

既報上海へ遠征した千里山ア式蹴球部の一行は昨秋部長水谷教授に引率せられて無事歸朝したが同地に於ける戦績は次の如くであつた由である。因に南洋大學との對戦に一點を入れたのは我國では空前のことに屬する。

▲十月二十六日對復旦大學五對〇敗▲廿七日對南洋大學四對一敗▲三十日對東亞同文書院一對七勝

千里山野球部報

關西學院に敗る 既報大阪毎日新聞後援關西野球聯盟秋季リーグ戦に於ける關西學院の第三回戦は昨年十一月七日午後二時四十分から甲子園球場に於いて高田(球)佐竹(壘)兩氏審判の下に開始左の戦績を以て關西學院の勝ちとなつた。

關西大學
林 森 田村 金政 川藏 近尾 坂勢 横澤
三 投 遊 二 左 一 捕 右 中

35打數30
7安打4
9三振3
0四死0
0機打0
0盜壘0
0失策2
3二打1

關西學院(先)
捕 沼田 谷田 倉田 三輪 辻 松本 田島 井岡 島
二 遊 投 中 左 三 右 一

得點 關學 0 0 2 0 0 0 0 0 0 0 2
關大 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

同志社に勝つ 超えて十二日午後二時四十分から寢屋川球場に於いて同志社大學との第三回戦を行ふ。三輪(球)宇隨(壘)兩氏審判同志社



第九回關西蹴球聯合會記念(洛北大原霞光院にて)

の先攻にて開始したが兩軍の力相伯仲して九回目に至るも勝負決せず十回目の裏に至つて本學好機を捕へ四對三で同志社軍を敗つた、當日のメンバー次の如し。

大村 田藤 政川 阪勢 澤林
川 森 近 金 菊 尾 能 横 林
6 1 3 4 7 2 9 8 5

大 栖 林 田 原 田 本 上 野 根
同 4 5 1 8 3 9 6 2 7
打35 三 8 打36 三 3
安 4 四 0 安 6 四 2
機 1 失 6 機 1 失 5

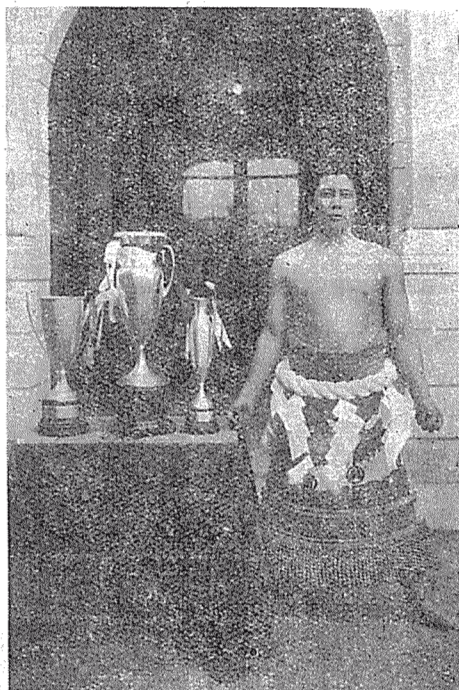
因に、今回リーグ戦の成績は關西學院第一位を占め本學、同志社の順となつたので毎日新聞寄贈のトロフィーは關西學院の保持するところとなつた。

明大を敗る 同月二十六日遠來の明治大學野球部を迎えて阪神甲子園球場に戦ふ。午後二時二十分から佐伯(球)富永(壘)兩氏審判の下に本學の先攻に開始、第三回の裏に於いて明大に二點を先取せられたが本學選手敢へて焦らず第六回に二點を取り返して同點となり、更に第八回に一舉四點を奪取して大勢既に定まり結局八對三の成績を以て本學の大戦に歸した。

福島野球部報

久しく雌伏してゐた福島野球部は昨秋來屢他校と試合して凡そ次の如き戦績を示した。

龍谷大學を破る 十一月五日午後三時から寢屋川球場で龍谷大學と戦ひ八對六で本學の勝利となる。(審判境球、樋口壘兩氏、バツテリ一關大一二井、森脇、龍谷一杉下、多田)



手選部供相田竹るせ退引

寶塚協會に破る 同月十二日午後三時から寶塚球場に於いて寶塚協會B組と戦ひ片岡(球)原山(壘)兩氏審判の下に開始したが降雨の爲め第七回にて中止、八對四で本學敗れた。

大谷大學に勝つ 超えて二十四日午後二時三十

分から寢屋川球場に大谷大學と對戦六對零で本學大勝した。審判五百井(球)、北尾(壘)兩氏、バツテリ一(關大)二井、品川、(大谷)岡崎、輪泉。

立命館に敗る 同月二十九日午後二時五十分から寢屋川球場に於いて立命館大學と戦ひ、上田(球)大平(壘)兩氏審判の下に開始十三對八で立命館大學の勝利となる。

竹田選手引退記念兼第五回近畿中等學校學生相撲大會

多年學生相撲界に強剛の名を走せた竹田繁七選手が愈來る三月を以てめでたく卒業するので、同君の引退記念を兼ねて、本學相撲部年中行事の一である近畿中等學校學生相撲大會が、去る十一月十五日午前八時から、堺市大濱相撲場に於て開催せられた。

中等學校の會するもの二十數校、選手七十餘

名、何れも奮戦力闘して左の結果を得た。中等學校決勝戦に先ち、午後一時、竹田選手は約一萬に餘る觀衆の熱狂歡呼裡に、往年同

皇陵崇敬會報

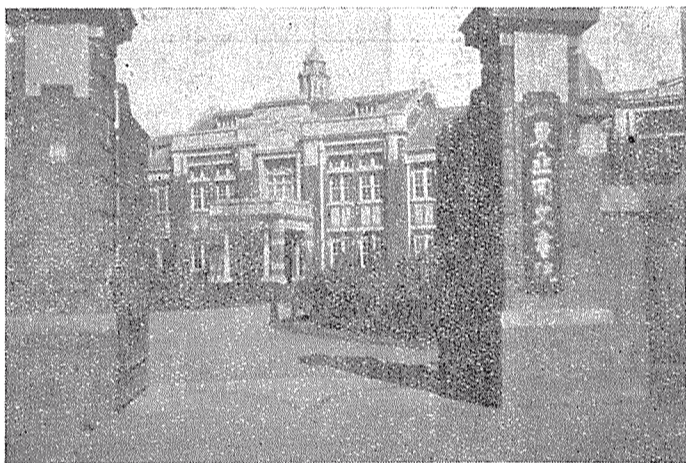
第七回例會 昨年九月二十三日第七回例會を開く。天よく晴れて來り會する者十二名、横

多く埴輪の露出してゐるのを珍しく眺めた。此附近は石器時代の遺物が多く又大阪陣の時に於ける激戦地で古蹟多く一同は愉快な秋の一日を過し得たことを陵墓長に謝して歸途に就いた。當日出者次の如し。

特別會員 横卷茂雄、河村信一、山本順應の三氏

正會員 山下喜代志、藤原政一、淺見敏郎、入江堅壽、高岡俊夫、齋藤湊、森井惣吉、溝邊文和、奥川武郎の諸君

第八回例會 十月三十一日天長祝日の佳辰に同 同 (復旦大學庭に於ける彼ゆ選手)



フ式園球部渡支器報 その一 (東亞同文書院)

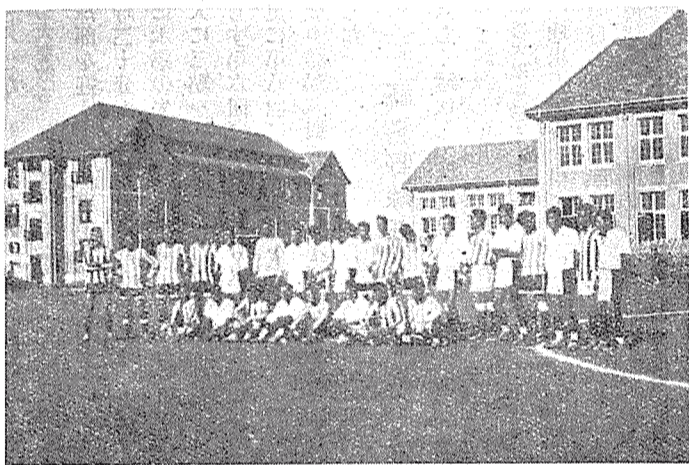
學生及紳士混合戰成績
一等 中村(清風會) 二等 大守(關學)
三等 猿丸(同大) 四等 山口(本學)
學生對紳士正五番拔
大阪藥專の森山君見事五人を抜いて學生側の勝利なる。

陸上部主催驛傳競走

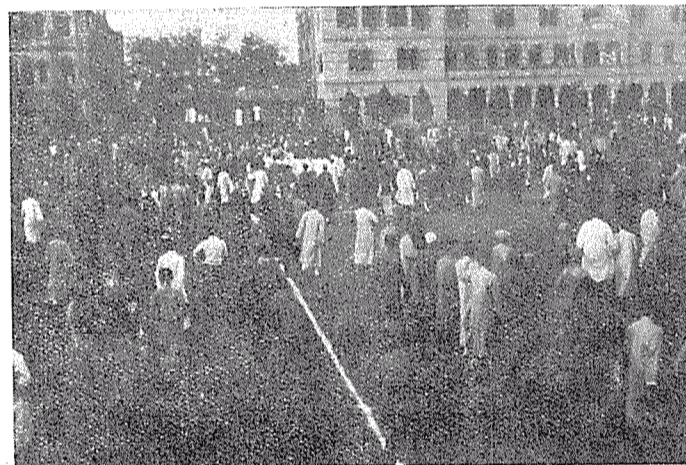
千里山陸上部主催の全國中等學校驛傳競走は昨年一月始めて大阪、寶塚間に行つたが本月十日その第二回を前回と同じく左の六コース(約三十哩)に行ふことになり着着準備中である。

大毎本社前——服部——池田——寶塚——池田——服部——大毎本社前

卷大佐引率の下に阿部野橋出發、大鐵電車にて雄略帝陵へ向ふ。同御陵參拜後陵墓守長の案内にて河内の各所に散在してゐる古蹟を探りながら各御陵の參拜を行ふ。即ち允恭帝、安閑帝、山田皇女、日本武尊、來目皇子、應神帝、仁賢帝、清寧丁陵、仲姫皇后の各陵墓を歴拜し、更に附近の藤井寺、野中寺、道明寺、譽出八幡、道明寺天滿宮等に參拜した。殊に應仁帝陵は三段に築いた前方後圓で陵の大き



勇み立つた會員は早朝より機放ヶ嶽の嶮を突破せんま先づ上賀茂神社に詣で八時既に京都を後にした。行く行くに時雨に一段の美を増



同 その三(南洋大學試合後の群衆)

があるところである。陵は常照皇寺の境内にあつて參拜後寺院内を拜觀し次いで江口氏の案内で周山まで徒歩し途中招魂社、城山を見る。前者は維新の戦に没した勤王の士を祀り後者は明智光秀の築いたところである。十二時周山に着し自働車で嵯峨に向ふ、途中高尾に下りて高雄、梶尾、梶尾の紅葉を見無事歸阪した。當日の出席は次の諸氏であつた。

特別會員 河村信一、山本順應の二氏
正會員 森井惣吉、入江堅壽、吉松須賀根、

奥川武郎、溝邊文和、齋藤漢の諸君
第九回例會 大原の奥に古き物語りの跡を訪

ね、奥山の麓にしばしば八百年の昔を忍ばばや
ここに會員一行十餘名京都の出町葵橋に集
合した。時は十四年十一月二十二日である。
此日新町講師は特に一行の先達兼臨地講演者
として参加された。叡山電車を乗り捨てて法
皇行達古道を女院御遺世の跡へ向ふ、山は
浅いが紅葉尚ほ残り小流には水晶のやうな水
がたばしつてゐる。途中天武天皇の古蹟竈風
呂を見つづ遂に寂光院の門前に來た先づ御庵
室を拜觀して六萬體の地蔵、門院、阿波の内
侍なごの像を見る、夫夫造詣の深い新町講師
の説明を聞いて日常りのよい庭の一隅に延を
敷いて解當を使ふ。更に院の後に建禮門院の
卒塔婆を拜し三千院に向ふ。こゝは有名な梶
井宮の舊跡、種種の寶物に心を奪はれながら、
短い秋の日足を惜しんで後鳥羽、順德二帝の
陵に詣でて承久の昔に思を返した。道を轉じ
て更に音無龍を見、袖道を傳つて惟喬親王の
墓に詣で若狭街道を南に深き思を大原に残し
つつ京都へ引返した。終りに同會では陵墓守
部、寂光院庵主の御好意を感謝してゐる。當
日の出席者は次の通りであつた。

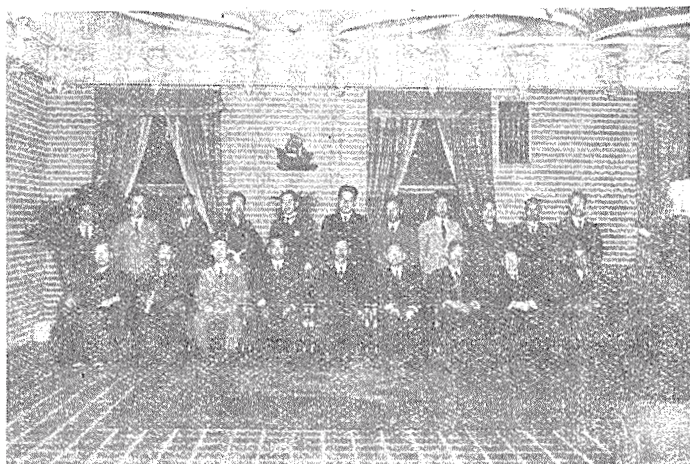
特別會員 新町徳之、河村信一、山本順應
の三氏

正會員 牧山儀平、野間豊、山下喜代志、
淺見敏郎、入江堅壽、齋藤漢、森井惣吉、
溝邊文和、奥川武郎、藤原政一の諸君

第六回工業見學

十一月十一日午後放課後降りみ降らずみの時
雨の中を會員一同河村講師に導かれ第六回工
業見學として新淀川下流姫島町ラサ島燐礦株
式會社大阪支店に赴いた。同工場は化學工業
殊に無機化學工業の會社として關西の重鎮で
あるが支店長の製造井に製品に關する約一時

間に互る詳細にして明快なる御講演を聞いた
後五萬坪の大工場内にある各種施設を見學し
た。鹽酸硝酸等の主要酸類から晒粉硫化曹達
鹽素苛性曹達重亞硫酸曹達芒硝鹽化硫黃鹽化
石灰等の製造工程に就て工場員の懇切なる實
地説明に依り今更ながら化學工業の玄妙不思
議に驚嘆し、殊に甲の製造廢物より乙を製造
し丙作業の餘熱を丁作業に利用する等輪廻作



第二回第一回觀覽會記念撮影 (前號記事参照)

業の巧妙を賞した。其他鉛室過燐酸肥料製造
食鹽電解裝置等何れの所に於ても同社獨特の
新法の應用を見技術員諸賢の不斷の御努力の
一方ならざる事を感心した。因に見學團一行
は無機化學工業の一大百科全書を熟讀したる
以上の有益なる見學を終へたる事に對し同社
支店長始め社員諸氏に厚く感謝してゐる。

近畿中等學校雄辯大會

福島學舎專門部豫科自治會主催近畿中等學校
優勝雄辯大會は去秋十月二十四日午前十一時
から市内天王寺公會堂にて開催、各中等學校
の参加多數により聴衆亦堂に溢れて頗る盛會
であつた。

審査の結果一等(京都一商)北村治三郎君、二
等(關西甲商)河合正雄君、三等(聖峰中學)中
村朝雄君と定り夫々賞品を受けた。因に當日
の辯士及演題は次の通りである。

一、開會の辭(幹事)伊加井磯五郎君、一、若人の
叫び(本學)上島達君、一、腕力(今宮中學)角川勇
次郎君、一、生活苦のどん底より(比叡山中學)春
木廣資君、一、農は國の大本なり(甲陽中學)服部
茂君、一、労働者の渦中に立ちて(兩洋中學)黒山
陽三君、一、平和を求めて(貿易學校)淺田駒三君、
一、魂を改善せよ(平安中學)幸川忠雄君、一、敬
愛する大阪市民諸君への眞實の叫び(京都桃山中
學)谷 二君、一、人生を凝視して(東山中學)金
丸祐一君、一、不幸に遭遇せざるものは不幸なり
(聖華中學)中村朝雄君、一、現代學生と將來(大
阪桃山中學)宮内儀三郎君、一、眞に之れ勤儉力
行の秋(神戸二中)志智慶次郎君、一、一滴の聖(東
寺中學)安部光一君、一、諸君(福島商業)矢頭熊
夫君、一、我國目下の急務(明星商業)川島晴君、
一、人類最高文化建設への青年の覺悟(上宮中學)
吉岡一雄君、一、信念に生きよ(八尾中學)木村繁
雄君、一、挨拶(司會者)山根金太郎君、一、神を
欺く惡魔の殿堂(神戸青商)崔孟暉君、一、愛の生
活に歸れ(京都二工)辻井幹一君、一、果して吾人
の社會は急激なる改革を要すべきか(關大二商)八
木末治君、一、恵まれざる者の爲めに(神戸鐵道
教習所)岡崎楠雄君、一、饑饉に悩む魂(中外商
業)三木武夫君、一、精神的文化こそ眞の文化なり
(高野山中學)藤生義澄君、一、貧しき生活につ
いて(生野中學)島本一男君、一、此處に一つの道
あり(大谷中學)旭賢雄君、一、憂國者の叫び(關
學中)進來信一君、一、日本禮讀(京都一商)北村
治三郎君、一、我高かに叫ぶ(神戸青英商)岩本政
義君、一、日本よ偉人生れよ(天王寺商業)龍山茂
君、一、怒を要求するの秋(京都二商)佐藤勉君、
一、經濟的困難と青年の使命(關中)河合正雄君、

有翼會雄辯會

福島學舎法科一學年有志より成る有翼會では
其第一回雄辯大會を去年十一月一日午後六時
から尼崎市西本町圖書館樓上に於いて開催
多大の成功を収めた。演題及び辯士次の通り
であつた。

一、開會之辭(委員)正井善三君、一、冬枯の峰
中村真夫君、一、思想善導の眞諦(外山英一君、
一、政界革新の彈丸(小玉秀雄君、一、國體精華
發揮論(田中久雄君、一、突貫一撃(上田貞之助
君、一、矛盾の叫(中村太輔君、一、萬物の靈長
? (據屋點助君、一、重忠の日本(小室官之助君、
一、司會者挨拶(岡本伍一君、一、社會相の一端
山口秀雄君、一、過去に立脚して(赤尾好保君、
一、震災三年の秋(灘龜藏君、一、帝國危急の秋
大熊隆君、一、我國體と民主主義(中塚藩君、
一、世相の流轉(阪口稔君、一、開會の辭(委員)
八木剛一君

第二商業雄辯會

關西大學第二商業學校では昨冬十一月十四日
午後六時から同校大講堂に於いて同校辯論部
主催の校内雄辯大會を催ふした。中島、松岡、
黒田、土井、郷、中西、三木、久堀、竹田、出田、八
木、三藤、三井、美濃、能勢、田原、上田、福井、向
島、栗島、赤山、磯邊、佐佐木、八木(末)、藤原、
永海、山口、松元、久保の諸君夫々熱辯を揮ひ
盛會裡に會を閉ぢた。審査の結果左記の諸君
夫々受賞し戸田教諭之を發表した。尚ほ當夜
特に宮島關西大學教授が出演されたことに對
して同部では深く感謝してゐる。

一等(三A)赤山一郎君、二等(一C)藤原重太
郎君、三等(二B)美濃昇三君、秀逸(三A)黒
田嘉一君、(二A)八木正一君、(三B)福井治平君、
(二A)向島文策君、(三B)八木末治君

學生寄稿

ドイツ語の研究に就いて

法學部法二 山 池 浩

嘗つて友人經濟科の某君が私に向つて「君は一體獨逸語を研究して何にするのだ」と問ふ事があった。私はこの不意の質問に對して答へる勇氣がなかつたからそのまま無言で居つた。處が最近に至つて、同君が獨逸語の研究に没頭してゐると聞いて私は奇異に感ぜざるを得ない、と同時に同じ研究中にある私としては同君の爲めにこの傾向を陸ながらよるこんでゐる次第である。「獨逸語の研究」と云ふことが必要であるか、否か、と云ふ様なことは今の私には論外で、兎に角、今後獨逸語を研究せんとする若人達にとつて若し多少でもこの小文が参考にならば私の望外の幸福である。一體日本に於ける語學教育は英語教育から初まつたものだらうから今日英語の發達と云ふものは實に目覚ましいものである、だがこれをもつて完全だとは云ひ得まい。まして獨逸語に至つてはその感が一層深いのは當然である。然しこれらの事柄をもつて吾等は決して悲觀する必要はない、と云ふのは英語の研究よりも學的に獨逸語の研究の方がし易いからである。即ち發音學から云つて見ても、苟も獨逸語を研究しはじめた人なら誰でも知つてゐる通り文字にサイレントがないので書いてあるまゝ讀めばよいのだからほんとうに樂だ。勿論正しい發音に付いて云つてゐるのではないことは云ふまでもなからう。文法に至つても、複雑である英文文法よりも頼りになる。所謂學的研究に最も適した性質を有してゐる、通常英語は入門は易いが極め難く、獨逸語は入門は困難だが極め易い。と云ふは英語は一寸判りはするが仲仲完全に

判らないことで、之は要するに英語の知識が個別的で普遍的でないからであり、之に反して、獨逸語は當初の普遍的原則的知識を了解するまでは非常に困難だが、一度判れば之が共通の知識だから自然一般に判つて來て概念がつかめること云ふことを意味してゐるのだらう。そんなことは兎も角として吾等が獨逸語を研究しやうと思ふなら次の様なことを心得てゐることが最も大切なことではあるまいか。

一
吾等は何と云つても第一番目に文法を了解しなければならぬ。「俺は文法は知らなくとも本さへ讀めればいい。」と云ふ人がまゝある。現に私の友人にもそんな事を云つてゐる人が少くない。誰だつて文法を知らないでも本が讀めればいいにはきまつてゐる。だがそんな虫のよい話は既に前提からして誤つてゐる考へ方ではなからうか。成程私達日本人の文法は知らなくとも日本の本なら讀むことが出来る。だがこれは嚴格に云ふと文法を學的に研究してないこと云ふに止まつて、實は文法を全然知らないこと云ふわけではない。更に云ふなら確たる知識は持たぬが文法の漠然たる知識は持つてゐること云ふことになる。従つてこれらが相關聯してよし完全に讀めぬにしても自身には讀める様な感じがするまでである。こう云つて來ると吾等が獨逸語を研究しやうとすれば、やつぱり文法が必要になつてくる。これに付いて八月號の獨逸語學雜誌に法學士野村次夫氏が次の様な事を云つて居る。「自分が嘗つて獨逸の或る法規の翻譯に際し、「外國へ齎らさるる商品」と云ふ譯のつく獨逸文に疑があつたので或る經濟學者たる帝大教授に質した時、「外國で消費せらるる商品」と譯され大得意の專問の知識で前後の聯絡を巧妙に説明せられた事を記憶して居る。が之は *verbringen* と云ふ文字の過去分詞 *verbracht* を *verbrauchen* の過去分詞 *verbraucht* と誤られたので其の誤の原

因は一方に於て生産、消費、流通、と云ふやうな經濟學上の術語が先生の頭を始終去らぬ爲めであらうが、この動詞の前の前置詞の *in* が四格になつて或狀態から或狀態の變化を示してゐる以上、靜的意味の「消費」が當はまらぬことは、少し文法に氣を付けておれば直ちに理解されることである。「こんな風で今日相當立派な學者が而も自分の專問的知識に基いて譯されても文法を輕視される結果とんでもない誤を生ずるのである。更に之に類する例をあげるなら *Man geht über die Brücke* とあれば、*der Brücke* が女性三格だから人が橋の上を沿つて歩んでゐるのであり、*über die Brücke* と四格であれば、狀態の變化を意味するのだから人が橋の上へ歩み移ることにならう。又日本語で「私は詩人として彼を賞讃した」と云ふ場合に、詩人たるは私であるか(甲)、彼であるか(乙)、必しも判然しないけれど、獨逸語に於ては文法さへ知れば、これらの關係は至極明瞭である。即ち甲の場合なら *Ich lobte ihn als ein Dichter* と *Dichter* を一格にすればいいし、乙の場合なら *als ein Dichter* と *Dichter* を四格にすればいいわけである。其の他例をあげれば數ふに追のないほど多くあるが今はその餘白を許さないからこれで止めて置かう。だがこれ丈でも大體わかる様に誤りの原因は凡て文法の輕視と云ふことに基くものである。今日同じ獨逸の經濟書の譯本が經濟學者として自他共に許してゐる四五人の異つた先生によつて譯されても、各自重要點に於て異つた譯文になつてしまふのも、蓋し文法を輕視する結果ではなからうか。して見ればまして今なほ研究中にある吾等は文法の如何に重要であるかを認めねばならない。勿論極端に文法にこだはることは不可なるは云ふをまつまい。

二
第二に吾等が獨逸語の研究中に在る時は英語に於ける觀念を一切忘却しなければならぬと云ふこ

とである。このことが獨逸語を研究する吾等を如何に惱ますか、に氣付いた私は從來まで餘り重要視されてゐない、この點を殊に強く主張したいのである。中學時代から英語を教へられた吾等には、同じ横文字だから獨逸語もその文章の構造乃至それに含有してゐる心持ちも同様であらうと早や合點して始終頭から離れない。勿論兩語共相類似した點は多々あるけれど、それよりも、もつと重要な兩語共に各異つた特徴を持ち、各異つた心持ちを有してゐることに氣付く方が大切であらう。もう一度判り易く云ふなら、英語方面から受けた先入主から解脫してこそ、はじめて獨逸語の正體をつかみ得ることが出来るものである。この事は動詞に付いて其感が一層強い。早い話が吾等が完了現在といへば、直ちに過去と現在との中間時であると思ひ、過去完了を過去以前の時を示すものだと考へてしまふから、どうしたつて獨逸文法不可解の嘆聲を發せざるを得んやうな事になつてしまふのであらう。實際に考へて見ても時といふものの上には過去と現在と未來の三つの區別しか成立し得ないものであつて、過去と現在の中間時であるとか、過去以前の時といふものが有り得やう筈がないではないからうか。だから完了時と云つてもこれを實際の時の上から言へば、矢張過去、現在、未來の關係を表すに過ぎない。完了現在と云ひ、完了過去と云ふもその内容實質は一面に於て過去であること云ひ得やう。然るに、吾等はこれらの事を凡て曲解し誤解してゐた、と云ふよりもこれらを曲解し誤解した文法書を讀まされ、時には教へられた事すらあつた。これは随分亂暴な話であつて、これと云ふのも英語から受けた先入主から來てゐることではあるまいか。或文法書などは現在完了を定義して「現在に於て動作の完了せるをいふ」としてある所から、吾等は *Ich habe das Buch gelesen* と云ふ文章を「私は今その本を讀んでしまつた所だ。」と云ふ風に譯したが、又この譯し

方を以て完了現在の凡ての役目だとも思ひ込みた
がる。云ふまでもなく、完了現在に「今」方して
しまつた所だ。」云ふ様に所謂現在の刹那に於て
動作の完結した事をも意味する事はあるが、獨逸
語に於てはそれをもつて完了現在の本来の役目で
あるとは云ひ得ないのみならず、それをもつては
獨逸語の真味を解することは到底出来ない事を注
意したのである。もつと判り易く云ふなら過去
形と比較して見ればいい。即ち ich las das Buch
と過去形であれば過去に於ける行動を表はすもの
であるから、これに als ich noch jung war (私
が未だ若つた時に) と云ふ様な言葉を付けたとし
たら、一層明瞭にならう。之に反して、完了現在
の方は今し方であらうと、いつの過去に生じた事
であらうと、現在から見てその行動が完結して居
る場合なら Ich habe das Buch gelesen と完了
現在形にすべきである。

私は情けないことに英語に對する確たる知識はな
いか英語の時稱の用法には本文の動詞が過去形
なるときは副文章も過去形でなければならぬと云ふ
様な制限がつけられてゐる様であるが、獨逸語に
於てはそんな制限は全くないので、内容の如何に
依つて自由になし得るの特徴を有して居る事を知
らねばならぬ。例へば Ich komme heute von
Köbe und habe gesehen, wie zahlreich die
Engländer sind. 『私は今日神戸から来たので
すが、まあ非常に大勢の英國人を(途中で)見て來
ました』と云ふ文章を見るに ich komme と云ふ
現在形と habe gesehen と云ふ完了現在形と二つあ
る。この場合、gesehen する動作は komme す
る動作よりつと以後に生じたことではあるが、
gesehen したのは現在から見て既に終つてゐるこ
とだから、完了現在形にしたのであり之に反して
komme の方はその動作が今決して終つてゐるの
ではなく、「今神戸が参りましたのですが」と云ふ
やうに今到着すると同時に云ふ言葉だから現在形

を用ひたわけです。
こゝやつて見れば、大體判る様に吾々が獨逸語を
研究する時にはさうして英語より受けた先入主
を取り去つて新しい氣持になり獨逸語の特徴とす
る所を探究しなければならぬことになる。これら
の點についての詳細は柏谷氏 praktische Deu-
tsche Grammatik 中に在り又獨逸では Wismann
氏の中にも力説してあつた様に記憶する。

三

こゝして雜感として述べて來ると云ひたい事が次
から次へ出て來るが、こゝでその全部をつくす
ことは到底出来ない。それらはいづれ後日云はせ
ていただく考へてゐる。だがもう一つ、殊に日頃か
ら云ひたいと思つてゐることは獨逸語學はやはり
獨逸語のみに關する學問である、と云ふことであ
る。だから獨逸語の知識が出來たからと云つて、
如何に獨逸語で書いてあるとしても、それをもつ
て直ちに哲學の本もよめれば、經濟書も、法律書
も、其他なんでも讀める云ふわけではない。
私の友人の中でも君は長らく獨逸語の研究を續け
て來たのだが、こゝの法律的解釋はさうたらうと
か。

この經濟的意味はさうであらうか、などそのわ
からぬ箇所を内容的にまで立入つて問はれるので
恐縮することが度であるが、これは問ふ人も間違
つてゐれば答へる人も誤りであらう。このことは
獨逸語を専攻される人は勿論他の人でもよくよく
考へて置いていただきたい點の一つである。

最後に我が大學内には既に英語會もあれば佛語研
究會とか、云ふものもある、のに我が獨逸語のみ
單り斯の如き有益なる會の催がないことは遺憾
に堪へない。尤も獨法會と云ふものはあるがそれ
は専ら法理學に關するものであつて、これとは別
問題であらう。私は今までの經過から觀て又凡ゆる
點から察して獨逸語研究會と云ふ様なものの生
れ出づる事を決して急ぐわけではない、が、何れ

將來生れ出づる運命を持つてゐるものなら一日も
早く、而も内容の整つた所謂名實共に備はつたも
のが生れ出づる様に心懸けてゐて貰ひたいもので
ある。このことは獨逸語の研究中に在る方は勿
論今後獨逸語を研究されんとする特に豫科生の方
方に充分の期待をもちたい。そしてその實現に向
つて歩一歩確實につめていたゞき度いものである。
其日の來るのを心から希望して筆を置く次第
である。(一四、八、六)

學生日記 (4)

章 三 作

それから 三幕

(A Momentary drama)

第一幕

ある喫茶店の一隅。

兄。ホットオレンヂだ。

妹。アラ!

兄。待つた。(妹に)何がアラだ。

妹。妾、チヨコレートよ。

兄。生意氣だな。(ボーイに)チヨコレートだ。

ボーイ。チヨコレートお二つ?

兄。馬鹿。一つ宛だ。

妹。兄さんたらいつもこれだわ。オレンヂ、オレ
ンヂだつて。

兄。面倒だからさ。

妹。だつて兄さんは、ヤヨイさんには親切だわ。

兄。馬鹿な!

妹。ママ嬉しさうなお顔!

兄。馬鹿。

妹。でも妾だつて嬉しいわ。ヤヨイさんが妾の姉
妹になるのですもの。

兄。もういゝよ。

妹。云つてあげてよ。何も彼も。

兄。お前は不良だれえ。

妹。何でもいゝわ。それより、妾の質問に答へた
ら、妾いゝことを云つてあげるわ。

兄。仕方がないね。

妹。仰つて?

兄。ウン。

ボーイ。お待ちせ致しました。

兄。ヤ。

妹。まあ變な兄さん。ボーイに迄挨拶なんかして。

兄。お前は僕の一々に干渉するんだね。

妹。干渉……ぢやないわ。觀察だわ。

兄。フン。生意氣な詩人奴。

妹。何だつてかまはないわ。さア答へて頂戴。

兄。よし來た。

妹。たづねますよ。——兄さんは嬉しいでせう。

兄。いゝい。

妹。だつて約束ですもの。

兄。なアんだ。それが約束の質問かい。ぢやア仕
方がない答へるよ。——お前の想像通りさ。

妹。嬉しい? まあ本統に? ぢやアね。ごれだけ嬉
しいか云つて頂戴。

兄。困つたね。それや無理だ。物差をあてるわけ
に行かないから。

妹。でも心理學者で、地理學者で、小説家のTさ
んは、心持ちを計ることが出来るつてこと
ですわ。

兄。それや偉い人はさうかも知れないね。だが兄
さんぢや駄目だ。

妹。でも兄さんは秀才つてぢやないの?

兄。さうかも知れない。

妹。狡猾くいい成績を稼いだんぢやなくつて? ま
アあの顔! ぢやアかぢりつきなの? あさまし
いわ。

兄。チエツ。

妹。怒らなくつてもいゝわ。それよりも先刻の宿
題。ホラ、ごの位嬉しいか聞かして欲しいわ。

兄。まだか。うるさいな。

妹。約束ですもの。
兄。云ふよ。お前なんか、どうなつても構はない位。

第二幕

場所。以前の所。一幕より一年後。夏。

妹。何故そんなに元氣がないの？

兄。お前は又何故そんなに嬉しいんだね？

妹。人が悪いわ。知つてる癖に。

兄。僕には氣の毒に思へるよ。

妹。まア！妾が？何故。

兄。一年の後には、きつと僕のやうに倦怠するよ。

妹。何故？

兄。やつぱり結婚なんて墓場さ。

妹。嘘！

兄。嘘なもんか。やめろ。

妹。……

兄。陳列のシャルムーズは美しいよ。しかし人間の心持ちといふ奴は目の玉と別々に働いてる。手にさるまでだ。やめろ。

妹。……

兄。やめよ。

妹。そんなものかしら……

兄。そんなものだ。やめろ。

妹。でも……

兄。何だ？

妹。やつぱり……

兄。手にさつて見たいのかい。

妹。え。

第三幕

やはり同じ場所。前幕より七八年後の夏。

兄。オレンヂエートだ。

妹。アラまた！

兄。ごつこい。お前等は？

妹。妾、メロンよ。(夫に)あなたは？

夫。クリームソーダにしやう。

妹。ぢやア妾も。

ボーイ。クリームソーダお二つ。オレンヂエート

お一つ。ですわ。

妹。(夫に)妾のも一所に立て、置いてね。(パラソルを渡す) あなた、すぐ引返してゐらつちやいよ。

夫。あゝ。だがリレーのやうな調子には行くまいからな。

妹。往復だけに一時間半もかゝるんですもの。多分駄目ねえ。憎らしいわ。今晚に限る用事だなんて。妾もう止さうかしら。

夫。い、ぢやないか。兄さんもゐらつちやろし。それに――

妹。でもつまんないわ。

夫。出来るだけ駆け足で行つて来るよ。せめて妹の獨奏だけでも聞いてやりたいし。

妹。さうね。ぢや妾會場で待つてらわ。

ボーイ。お待ち遠様。

妹。ぢや、早くあがつてゐらつちやいな、ね。そして早く……

夫。よし来た。ぢやア一飲みにして。

妹。まアこぼれますわ。(ハンカチでいたわる。)

夫。では。(立ち上る)

兄。(無言のまゝうなづく。)

妹。まアあなた。それは妾のパラソルよ。(ステッキをこり替る。)

夫。ごつこいしよ。(出て行く。)

妹。(兄に)何と云ふお顔なの？

兄。氣が抜けたよ。

妹。何故？

兄。すつかりあてられちやつた。

妹。まア嫌な人。

兄。お前は結婚してから、もう何年になるんだつたけな。

妹。さうね。兼子が生きてゐたら、もう一年生の筈ですわ。

兄。ボーウ。妙だね。

妹。變な人ね

兄。イヤ。大抵の人はだれ……物が氣に入るを

先づそれが欲しくなつて来る。そして、それを

手に入れるためには汎ゆる苦心をいさげな

い。求め難いものであればある程その人の欲

しさ加減は増長する。やつと苦心に苦心を重ねて手に入れる……

妹。おゝその人の幸福つたら！

兄。馬鹿な！それが終りさ。幻滅だね。

妹。違ひますわ。妾はそれからが本統の自分のものだと思ひますわ。

兄。さういふのは、それや嘘だ。人間の心持ちはそんなものぢやない。

妹。でも……

兄。嘘の皮だ。

妹。だつて……

兄。きつとそこには偽りが働いてゐる。でなけりや何か他の本統でないものが……

妹。必ずしも偽りぢやないわ。手にする迄は……情熱ですわ。それから――

兄。それから？

妹。その後は……さうね。努力ですわ。

ボーイ。十銭のお釣り。有難うございます。(幕)

謹賀新年

大正十五年一月一日

糸島實太郎

大阪市外豊津村

補缺募集

晝・夜間一年・二年各若干名

種北陽商業學校
(電話北六九〇六番)

市電天神橋第六丁目
終點北二丁目東入

大正十四年十二月二十八日印刷
大正十五年一月一日發行

編輯兼發行人 辰巳經世
大阪此花區上福島北二丁目
關西大學學報局

印刷者 飯田彌之助
大阪此花區土佐堀通四丁目五番地

印刷所 三有社
大阪此花區上福島北二丁目

發行所 關西大學學報局
大阪此花區上福島

福島學舎 關西大學
電話土佐堀(一〇四九)

大阪市外千里山 關西大學
電話吹田一二三

千里山學舎 關西大學
電話吹田一二三

謹賀新年

大正十五年一月一日

關西大學

役員 一同

教職員 一同

關西甲種商業學校教職員 一同

關大第二商業學校教職員 一同

關西大學擴張後援會役員 一同

學報局員 一同

校友會役員 一同

校友會大阪支部役員 一同

校友會東京支部役員 一同

校友會名古屋支部役員 一同

校友會和歌山支部役員 一同

校友會神戸支部役員 一同

校友會岡山支部役員 一同

校友會高知支部役員 一同

校友會福岡支部役員 一同

千里山學友會委員 一同

福島學友會幹事 一同

關西大學校友
並ニ御關係 各位

關西大學
關西甲種商業 指定洋服商
關大第二商業

大阪市上本町六丁目

長谷屋號

電話 南 四五一二番
振替 大阪 五五三八番

●今宮支店 ●釣鐘町支店

關西大學
關西甲種商業 指定

大阪市北區上福島北三丁目

明文堂
野島書店

電話 土佐堀 二二八六番
振替 大阪 三九九一番

本學校友 野島藤次郎

文房具、制帽
雜貨、食料品

關西大學給品部

千里山學舍學生控所 內
福島學舍學生控所

新春の御盛裝を
是非本館にて

歌橋寫真館

大阪市北區上福島中二丁目
電話 土佐堀 二七五一番

關西大學
關西甲種商業 指定

山本靴店

大阪市北區上福島北二丁目
(但淨正橋筋大和田銀行前)

謹んで御慶申上げます
相變らず御引立を祈ります

關西大學御用達

新らし屋帽子店

大阪市北區上福島淨正橋通
(但阪神踏切南延命館南隣)
電話 土佐堀 五七〇五番

謹賀新年

千里山學報 第三十五號

三〇

大阪地方裁判所部長
關西大學講師法學士

和田于一著

婚姻法論

(新刊)

紙四六判總布上製
數八〇〇頁
定價五圓八拾錢
送料拾八錢

著者が最も得意とする婚姻法を法制史的、比較法學的、分析的、立法學的に研究し、猶ほ斯法に關する判例の蒐集及び系統的の研究より婚嫁に關する皇室法の研究に迄及べる稀有の大著である。

關西大學講師
辯護士法學士

入江眞太郎著

不法行為論 (第卷)

(再版)

紙菊判脊革總クロス上製
數四八〇頁
定價四圓八拾錢
送料拾八錢

我不法行為法と英米のそれとを比較研究したものである。一讀、世人は世界に冠たる英米不法行為法の體系を知り、立法者は我不法行為法改正の資料を得、又法曹は斯法解釋の材料を得る。

關西大學教授

佐々 穆著

國際民商法撮要

(新刊)

紙菊判並製
數三七〇頁
定價參圓參拾錢
送料拾八錢

基礎準據法、國際民法、國際商法の三編、各部門の十八章に分ち、著者一家の見を示して詳述盡さるなく能く國際私法學の各論的説明を與へてゐる。學徒も實際家も必讀すべき書である。

二七九一三阪大營振
三五六一北話電

院書同大

崎根會區北阪大
地番八目丁三上

關西大學教授 宮島綱男先生著

經濟學原理

(卷 上)

菊判 總クロス製
紙數約 三百五十頁
コロタイプ刷肖像數葉
定價 金參圓五拾錢
送料 金拾八錢

新 刊

著者が其透徹せる推理力と豊富なる語學力を以て研讀潛思幾年の後遂に成つたもの即ち本書である。堂堂一般經濟の原理を論じて照合するところ古今東西の史實、學說に亘り而かも之が嚴精なる批判檢討を通して導き出だせる結論を更に一步現代の經濟事實に近附けたる點に於いて學界稀に見るの好著である。行文平明にして正確、敘述亦繁簡其宜しきを得て經濟學を正しく理解し現時行はるる諸種の學說に對して相當の批判力を得る爲めには先づ第一に讀まるべき書物である。加ふるに各節末には詳細なる參考書目を掲げて讀者將來の研究に便し、書中引用するところの學說に關係深き學者の肖像を十數葉の鮮麗なコロタイプ版として挿み裏面に其傳記を附して、學說と時代の交渉並びに學說夫れ自身の印象を一層深からしめんと努めてゐる。蓋し經濟學史としても一の纏つた好參考書である。敢へて大方に獎む。

上福島 野島書店、梅田新道 大同書院其他、各書店にて販賣す

東京市神田區錦町壹丁目貳番地

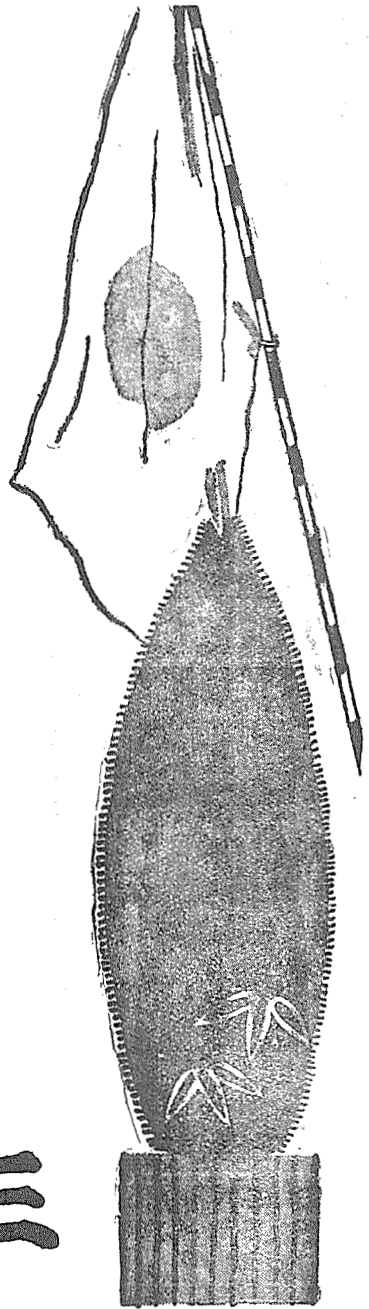
發行所 瞭文堂

振替東京五〇一六三番・電話大手四〇一〇番

大阪市西區阿波堀通四丁目

大發賣所 株式會社 大阪寶文館

振替大阪三四三番・電話新町三〇三三番



初日の光麗らけく

新装を凝らす一月の三越

明けましてお芽出度う御座います。
麗らかな初日の光を浴びて、三越の新装は一段々清新に、八階會堂に於ける
吉例の舞囃子、長唄、哥澤、箏曲なごりぐの妙なる初音の調べは、和やかな
歡びの氣分を湛めて、永遠に芽出度き御代の春を祝ぎます、何卒早々より
御來遊の程偏に御待ち申上ります。

◆寫眞部に限り元旦より無休にて新年御撮影のお需めに應じます。
◆新年の御旅行には、汽車汽船の切符も旅行行品も三越を御利用願います。



阪

大

三越呉服店